らぶ・ぱら☆

黒猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
らぶ・ぱら☆

【Ｎコード】
Ｎ４８８１Ａ

【作者名】
黒猫

【あらすじ】
自称常識人。でも変人。普通の高校生のつもりな“御子柴薫”の少し？変わった仲間達とのドタバタな、そしてラブコメな日常。

第０話：ぷろろ～ぐ

「俺らって負け組？」

「…なんだよ。いきなり。」

俺が通う星光学院・２ーＡの教室。いつもの様に、くだらない話しをしている昼休み。

唐突に、我が校が誇る最高の馬鹿、二ノ宮誠が、言ってきた。

「失敬なっ！俺達は二人で一人の馬鹿なんだ！…あっ、ちなみに俺が馬で、お前が鹿な。」

「心を読むなっ！」

変な力説をする誠に、脱力しそうになるのを堪えながらも、相手をしてやる俺って優しい。

「うむ。貴様は我輩の次の次の…飛んで２０番目くらいに優しいな。」

「だから、心を読むなっ！大体何なんだよ？負け組って？」

「そう！それだ！お前はともかく、この優しくてカッコイイ俺に、なぜ彼女が出来んっ！！」

「…。馬鹿だからだろ。」

「てことは、鹿のお前のせいかぁーっ！！」

「なんでやねんっ！」

ガックンガックンと俺を揺さぶりながら血の涙を流さんばかりの表情で…実際流しながら訴えてくる。

「言っただろう！二人で一人の馬鹿だと！俺一人なら馬ですむんだっ！」

…その発想が馬鹿なんだよ。

普段は似たような目で（心外だが）見られる俺も、コイツといたら常識人な気になってくる。

「俺は馬でも、超サラブレッド！連戦連勝、大金持ちな名馬のはずなのに、種馬にすらなれんっ！！」

…神様。下品なコイツを抹殺してください。女子が引いてるではないか。

（黙っていれば、格好良いんだけどな。）

改めて誠を見る。身長１８０はある体格に、製った顔立ち。茶色に染めた少し長めの髪。前髪が緩やかなウェーブを描き、その整った顔にかかっている。

そんな誠を観察していると、奴はワナワナと震えだし

「き、貴様。何を見つめて…。まさか、俺に惚れたのではっ！」

…神様。さっきの願い早く叶えて。

「俺は、彼女が欲しいんだ！彼氏はいらブギャッ！！？」

言い終わる前に、神様が願いを叶えてくれたのか、誠は派手に吹っ飛ぶ。

「…痛いじゃないか。親友」

俺に非難の目を向けながら頬を押さえる。

「ん？俺じゃない。神様さ。」

「やはり、お前はソッチ方面の人だったのか。」

「やはりってなんだよ。てか、話し進まねーだろが。」

「うむ。困った奴だ。」

（…お前がな。）

もはや口に出す気力もなく、心の中で呟く。

「周りを見ろ！最近はブームと言わんばかりに、カップルが急増している！まるで発情期ですと言わんばかりだっ！」

「…で？」

「俺も発情したいんだぁーーーっ！！！」

「死んでください。」

奴の心からの叫びに、即答する。

…発情って。ねぇ？

「何故っ！？」

目を見開き、唖然とした表情で俺を見つめる馬鹿。

「はぁ…。お前といたら、俺も永遠に彼女が出来ん気がするよ。」

「お前も、やはり発じょグハァッ！！」

言い終わる前に、再び神様の罰が奴にくだる。

「何ををする…。ソッチ方面の趣味はないぞ。」

「どっち方面だよっ！」

「むぅ。さっきからのその態度。よもや彼女が出来たのではあるまいなっ！？」

「…いねぇーよ。てか、出来ないだろ。あの悪魔達がいる限り。」

「だ～れが、悪魔なのかなぁ？お兄ちゃん♪」

（…はぅっ！もう戻って来てたのか！？）

俺の後ろに立って話し掛けてくる人物に戦慄しながら、振り向く。

その人物は……。

ああ、自己紹介が遅れたな。俺は、御子柴薫。こんな名前だが男だ。

第1話：いつもの昼休み

振り向くと、少し猫目気味な瞳で、俺を見つめる髪の長い女子がたっていた。

「もう。髪の綺麗な絶世の美少女なんて、照れるじゃない！」

体をクネクネとしながら、俺に微笑みかけてくる。

「言ってない。言ってない。てか、心の中どころか、モノローグまで読むなっ！」

（俺の周りには、変人エスパーしかいないのか？）

「美少女は心の中だろうが、モノローグだろうが、読解可能なのよっ！！」

「さいですか…。」

自分で美少女って言ってるよ…。まぁ、確かにそうなんだけど。

「あら、よくわかってるじゃない♪」

（…お願いだから読まないで。）

心の中で涙ながらに、プライバシー保護を訴えていると、思い出したかのように

「…で？悪魔って私じゃないよね？」

「いや、君に決まってるギャハラワニャヌヒャッ！！！」

口を挟んだ誠が、意味不明な言葉を残し、突如襲った衝撃に、キリモミ状態で消えていく。

（…死んだな。）

冥福を祈りつつ、笑顔で拳を拭っている彼女に弁明を試みる。

…死にたくないし。

「ふっ…。やだなぁ。月姫（かぐや）。んな訳ないじゃん！可愛い妹が悪魔だなんて！天使…いや、女神様だよっ！！」

「くすっ…。そうよね？可愛い妹が悪魔の訳ないものね？」

…あぁっ神様！！

誠とは違う意味で、助けを請いたくなる。

“御子柴月姫”

俺の三人いる姉妹の一人だ。

厳密に言うと、兄妹ではない。従姉妹にあたる。

ガキの頃、ある事情があり、俺ともう一人の妹は、御子柴家に引き取られたんだ。

従姉妹の姉もいるんだが…。

女ばっかしだよな。

御子柴家は、武術の道場を構えていてる（門下生はいないけど）皆、化け物じみて強いんだ。
ちなみに、今、御子柴家にいるのは、俺と三人姉妹だけだ。（二人は従姉妹だが。）
この家の中では、俺の地位はダンゴムシ以下な気がするんだよな。

…はぁ。

「…まぁいいわ。なんか彼女が欲しいとか騒いでたみたいだけど？」

「なんだ、聞いてたのか？」

「あれだけ騒いでたら聞こえるわよ。」

苦笑まじりに答えてくる月姫に、納得し、答える。

「まぁ…。彼女欲しくない奴はあまりいないだろ。いない奴にとっては辛いんだよ。」

「ふぅん。でもお兄ちゃんには関係ないじゃん。」

「なんで？」

「私の奴隷だから。」

「なんでやねんっ！」

サラッと答えてくる悪魔に、誠の時以上に力を入れて突っ込む。

「あははー。関西弁だぁ。冗談よ。彼氏よ。」

「いや、違うし！！」

「どーしてっ！？あの暑い夜は、二人で抱き合って寝た夜はなんだったの！？」

「夜も朝も、何もないわっ！！」

「まぁ…。勝手に私が、寝てるお兄ちゃんのベットに忍び込んだんだけど。」

「おいっ！！」

「お兄ちゃんの寝顔可愛かったわ♪」

ヨダレを拭く仕種を見せながら、うっとりとした表情で遠くを見つめる。

…ここに痴女がいるよー。

今更ながらに、この悪魔に戦慄する。

「やはりそんな関係だったのかっ！！背徳だぁーっ！！！」

（…ちっ。…生きてたのか。）

復活した誠が、どこからともなく現れ、ビシィッ！と月姫に指を向ける。

「愛があれば、何をしても許されるのよっ！」

…いや、それは違うと思います。

「しかし、兄妹だなんてっ！」

「正確には従姉妹だから、ＯＫよっ！！」

「裏切り者ぉ～っ！！！」

月姫の台詞に衝撃を受け、またもや血の涙を流しながら叫ぶ。

「いや…。裏切ってないし。従姉妹なの知らなかったのか？」

「ぐぬぬっ。貴様彼女いないと、出来ないと言っていたではないかぁっ！」

「あら、でも私の事好きって前に言ったわよ。」

（…あぁ言ったさ。包丁押し付けられたからな。）

思い出しただけで、背筋が凍る。残りの姉妹も似たようなもんだし。

「軍曹っ！軍治裁判ものだぞっ！懲役５００年だっ！！」

「…帰っていいですか？」

前頭葉が痛い…。ギャグで言えば、頭痛が痛いってやつ？

「軍曹っ！！…面白いじゃないか。懲役２５０年に減らしてやる！」

「俺の心を読むなっ！！」

「そうよっ！お兄ちゃんの心は私だけのものよっ！！」

「ちが～～うっ！！！」

…はぁ。…もう嫌。

溜息をつくなか、昼休みの終わりを告げるチャイムがなるまで、いつもの馬鹿騒ぎは続いて行ったのだった。

「その内、体も私のモノになるんだからぁっ！！」

第2話：たまにはこんな日も…。

『らぶのらの字もないよな。』

『これって恋愛物だったっけ？』

……はっ！？今、天の声が聞こえたような。

「どうかした？薫ちゃん。」

突如降って来た天の声に戸惑っていると、隣を歩いていた一つ上の姉が声をかけてくる。

今は学校帰りだ。

「なんでもないよ。お姉ちゃん」

「もう。いつも言ってるでしょ？乙姫って呼んでよ。」

プクッと頬を可愛く膨らまし、睨んでくる。
栗色の肩までかかる髪にクリクリッとした瞳。
月姫が綺麗なら、乙姫は可愛い部類になる。

「だって、お姉ちゃんだし。」

「昔は呼び捨てだったじゃない？」

鞄をブラブラと揺らしながら、懐かしむような表情で俺を見つめる。

（だって、年下だと思ってたし。）

今でも、生来の童顔のせいか見ようによっては、年下に見られることがある。

（まぁ…その割には胸はでかいけど。）

不謹慎な事を考えていると

「薫ちゃんのえっち！」

パンッ！と鞄をぶつけてくる。

「なっ…！まさか心を！？」

疚しさ爆裂な心を読まれたかと慌てるも

「うふっ。心を読まないでも、薫ちゃんの顔を見ればわかるよ？」

コロコロと笑いながら答えてくる。

…結局、心は読めるのね。

今は亡き、我が人権を何とか復権出来ないものかね？

叶いそうもない願いを胸に秘め、乙姫に目を向ける。

「…ん？」

目が遭うと、軽く小首をかしげ、そして何かを思い付いたかのように腕を絡めてくる。

「ちょっ…！乙姫！！」

「あははっ☆乙姫って呼んだねっ。」

動揺のあまり、つい出た言葉に嬉しそうに目を細め、絡める腕に力を込めてくる。

「ああっ当たってる！」

「あはっ。顔真っ赤！興奮する？ガォーッてなる？」

「な、何言ってんだよ！」

（どうもやりにくいなぁ。）

さっきまで、狂犬（月姫）を相手にしていたせいか、微妙に甘い雰囲気に調子が狂う。

（てか、本来同類のはずなんだが。）

「誰が何の同類なの？」

「…な、何の事でしょう？」

ムッと睨みながらも腕を離そうとはしない。

…やっぱり、心読めるんじゃん！

そう思いつつも、普段なら他の姉妹に負けず劣らずな行動をとるはずの乙姫が、今日は可愛く見えてくる。

…まぁ、実際可愛いけど。

「前半部分は余計だけど、褒めてくれてアリガト♪」

頬を朱く染め、瞳を潤ませて見つめてくる。

「だ、だから心を読むなって！！」

ヤバイッ！いつもとのギャップのせいか、メチャクチャ可愛い！！

「な…何だ！罠かっ！？…はっ！？わかったぞ！さっきの天の声の仕業か！！」

「何言ってるの？…薫ちゃん。私だって女の子なんだよ？」

……はうっ！

トドメを刺すような台詞を。

「いつもは、薫ちゃんの事、殴ったり蹴ったり投げ飛ばしたりしてるけど…。」

…おかげで、丈夫になりました。

変な感謝をしていると、小さな声で

「たまには…ね？」

「…そうだな。」

たまには、こんなのも…良いよな？

そう気分を切り替えると、夕日に照らされた町並みに二人の影を混じらせ歩き、久しぶりの感覚に心地良く家路に向かうのだった。

ちなみに、二人の様子を見ていた月姫は、まさに世紀末覇王のごとく門で仁王立ちし、それを見た俺は学校に逃げ帰るのだった。

合掌。

「ちょっと！ヒロインである月姫様の出番これだけっ！？」

第3話：織姫のお誘い。

「薫く～んっ」

部屋で、日課である誠の藁人形に必死に釘を刺しているときに、扉の向こうから舌ったらずな声で呼んでくる。

「入っていいぞ。織姫。」

「はぁい。」

中学三年の一番下の妹（コイツは実妹だ）が入ってくる。相変わらずチビだな。１５０ｃｍは絶対ない。

「…薫くん。何してんの？」

俺が額に汗を浮かべながらしている懸命な作業に、ジト目でたずねてくる。

「見てわからんか？世界平和の第一歩へ向けての神聖なる儀式だ。」

「神聖じゃないじゃん！」

少し引いた目で俺を見てくる。

…悪魔超人三姉妹が一人に引かれるのとは。

「薫く～ん？死にたいのぉ？」

「何がですか？マイ・スィート・シスター。」

額に青筋を浮かべるのを見てまで、馬鹿にする勇気はありません。

「それより何の用だ？後、薫くんではなく、お兄様だ。」

月姫ですら、お兄ちゃんと呼ぶのに。

「良いじゃん。昔みたいに、かおくんにする？」

相変わらず舐めきっとるな。

「…で、何か用か？」

少しモジモジし、チラチラッとこちらを見てくる様子に、嫌な予感を感じる。

「薫くん。明日デートして。」

「却下！」

０．０５秒で切り捨てる。

「ひどぉ～いっ！」

「ぐはぁっっ！！」

瞬間首が捻れるほどの、ビンタがとんできた。

「く…首が背中とコンニチワ！」

「そんなに早く、断らなくても良いじゃないっ！」

「首がモゲルような、ビンタしなくても良いじゃないかっ！」

「逆らうものには、死、あるのみなの。」

「始めから、選択件ないじゃんっ！」

ユラッと闘気を出しながら、迫り来る悪魔超人。

……恐いよぉ。

「ま、待て！お前まで、乙姫や月姫みたいな行動するなっ！」

「あたしが、本家なのっ！！」

「本家も分家もいらんわっ！何が悲しゅうて妹とデートしなけりゃならんのだ！！」

「兄は、妹に尽くすものなのっ！！」

…あかん！目が血走ってる。

「ちょぉっと、まったぁぁっ！！」

バンッ！

黄泉の国に旅立つ覚悟を決めた時、勢いよく扉をあけて、月姫が登場した。

…ちぎれ飛んでたな。

「話は聞いたわっ！」

…ややこしくなりそうな予感が。

「兄は妹に尽くすもの…。それは同感だわ。…でもね…。もう出来ないの。」

「どうして？月姫ちゃん？」

「それはね…。」

怯えた俺と、ちぎれた扉をバックに真剣な表情で向かいあう。

「…それは？」

「もう私専用に奉仕するお兄ちゃんだからよっ！！」

「アホかぁーーっ！！！」

「ええっ！！」

俺の魂の叫びに、月姫は驚いたかなように

「私の奴隷になるって言ったじゃないっ！」
…北斗〇拳使われそうだったからな。
あの日の悪夢を思い出す。
あの時すでに、誠は倒れてたよな…。
『恐るべし、北斗三兄弟。…ガクッ。』
とか言ってたな。
「月姫ちゃん…。それは本当？」
「もちろんよっ！」
「ちゃうわいっ！！」
俺の叫びを無視し、会話を進行していく。
「そう…。いつかは来ると思ってたけど。」
「ふっ…。やる気？」
見つめ遭う二人の間には火花が散、部屋中に闘気の渦が…。
ガクガクガクガク…。
部屋の隅で膝を抱えながら目を閉じる。

…タスケテ。お母さーん。

「死ねやぁっ！」

我が妹とは信じられん、ドスの効いた声で言いながら、月姫に拳を振るう。

「甘いわっ織姫！私とお兄ちゃんの愛には割り込めないのよっ！？」

部屋を崩壊させながらやり合う二人を尻目に、飛んで来た椅子に頭をぶつけ、気を失うのであった。

ちなみに目を覚ますと、乙姫に縛られて、拉致されていた。

「ん～？私も薫ちゃんとデートしたかったしぃ。」

…もう、ヤダ…。

第４話：それはとても大切な…。

『薫〜っ！一緒に帰ろ☆』

眩しいばかりの笑顔に

『義理チョコだからね。』

照れて俯くそぶりに

『本当に行っちゃうの？』

拗ねるその仕種に

『せいせいするわ！早く行っちゃいなさいよっ！！』

揺れる勝ち気な瞳に

何度、不思議な感覚に襲われ、鼓動を高鳴らせていただろうか？

今は隣にいない君。

あの頃は、一緒にいるのが当たり前だと思っていた。

当たり前の事など何もないのに。

別れの日に現れなかった君。

馬鹿な俺は、君を非難していたんだ。

来たくても無理だったのにね…。

その事を街についた一週間後に聞いた時

恥ずかしさと悲しさ、そして初めて高鳴る胸の正体に気付いたんだ…。

途中で事故に遭った君は、大きな病院がある都会へと家族と行ったんだよね。

連絡先も状態もわからないまま時は過ぎて行き、愚かな俺は、いつの間にか、君を忘れてしまってたんだ。

『薫〜！』

中学二年迄、当たり前と感じていた二人の日常。

まどろみの中、久しぶりに聞く君の声に…。

今、改めて当たり前の大切さを実感するよ。

「…ちゃん、薫ちゃん！」

「……ん。乙姫？」

「早く起きないと、遅刻しちゃうぞ？」

「…朝…か。」

腰に手を当て、呆れ気味の乙姫は、何かに気付いたのか、心配げに声をかけてくる。

「…涙。悲しい夢でも見た？」

「…夢…。そうだな。」

軽く伸びをし、笑顔で答える。

「とても懐かしい。大切な夢だよ。」

…そう。忘れてはいけない大切な事。

「そうなの？」

たずねる彼女の声に重なる様に、月姫と織姫の騒ぎ声が聞こえてくる。

「…ああ。」

相変わらずの朝からの騒がしさに、苦笑を交えながら答える。

当たり前になって来ているこの街の日常。

「じゃ、着替えるから。」

「手伝うよ？」

当たり前の用に答える乙姫。

「遠慮します。」

そんな日常だからこそ、大事にしなきゃいけないんだよな？

カーテンから漏れる、淡い光に目を細めながら俺は、大切な想いを思い出させてくれた君に、感謝をしつつ問う。

「…そうだろ？花音。」

第5話：ナンパに行こう。1

「出番だぁ～っ！！」

…また、始まったな。

退屈な授業がやっと終わり、帰宅準備をしていると叫び声をあげながら、こちらに突進してくる馬鹿が一匹。

「やっと、俺の出番がギャファッ！？」

とりあえず、鉄板入りの鞄の角を突っ込んでくる馬鹿の頭に突っ込む。

「…突っ込む×2とは…中々腕をあげたな。」

ダラダラと頭から血を流しながら、どことなく満足気な誠。

…血が緑色なのは気のせいだよな？

「それより…。やっと俺の出番が来たのだっ！遅いぞ作者っ！！」

俺の心配気な視線をよそに、会話を続けていく。

「よって、初回の俺達の会話の続きをするっ！！」

訳のわからん言葉に戸惑いつつ先を促してやる。

「…で？」

「うむ。この学校の女は、俺の魅力に気付かない愚か者ばかりだ！」

…気付いてるから、近寄らないんだよ。

俺の憐れみの視線を、己を讃える熱い視線と勘違いをしたのか勢いを増し叫ぶ。

「よって…。今日はナンパをするのだぁーーーっ！！！」

ザッパ～ンッ！！

何処から持ってきたのか、波飛沫の絵をバックに、ラジカセで音を出している。

「うむ。…ナイスタイミングだったな。」

満足気な顔をしながら、イソイソとかたずけていく。

…何処にかたずけるんだ？

誠の怪しげな行動には、毎度毎度疲れ果てる。

「じゃ、行ってらっしゃい。」

奴が、小道具をかたずける隙に去ろう。

「親友～！俺達は二人で一人だろぉっ！！」

すかさず縋り付く誠にヒジ打ちをくらわるが、ビクともしやがらねぇ。

「ええいっ！しがみつくなっ！暑苦しいっ！！」

「うぬぅっ！良いのか？これをばらまくぞっ？」

奴が何かを取り出し、見せくる。

「…ぶっっ！？」

思わず噴き出してしまった。

「貴様…。いつの間に！？」

俺と月姫が写っている写真。

ただの写真なら良いのだが、写り方が非常にマズイっ！

「うむ。この間、屋上でお前が押し倒されているときにな。月姫くんに撮るよう指示をされていて。」

…あいつぅ。

脅しのネタにするつもりだったな？

ご丁寧に、写真には字が書かれてある。

《禁断の兄妹愛・屋上での蜜月》

…おいっ。

文字の内容にのけ反りながらも、いつか復讐する事を誓う。

…１００％返り討ちだな。

己の無力さが恨めしい。

あいつら以外なら負けないんだけどなぁ…。

同じ武術家でも、あの三姉妹とはレベルがな…。

…諦めるか…。

「…わかった。行くよ。」

「うむ。信じていたぞ。アミーゴッ！」

「やかましいわっ！！」

心の中で盛大に溜息をつきながら、街へと繰り出すのだった。

「…続くのかっ！？」

第6話：ナンパに行こう。2

「…続いてしまった。」

学校と我が家の中間地点にある繁華街。

俺は誠の卑劣な行為によって、ナンパをしに来てしまった…。

（続編になるなよ…。）

恨みがましく、誠を見遣る。

「うむ。作者は我が味方ナリッ！」

余程嬉しいのか、クネクネと怪しげな動きで、通りすがる女性達に視線を追わす。

…気持ち悪いから、ヤメテ。子供が石を投げようとしてるじゃないか。

仲間と思われたくない俺は、少し離れてソッポを向く。

「お～いっ！御子柴よっ！ギャルが大勢いるぞっ！！」

…あの野郎。

「より取り見取り。困ったなぁっ！半分ずつなっ！！」

「やかましいわっ！！」

何が半分ずつだ。せっかく他人のフリしようとしたのに！！

…ほら。俺の周りから、女の子が消えたじゃないか。

（暫くここには来れないな。）

悲しくなりながら、遠くを見る。

…泣いてなんかないもん。

そっと、目を拭いつつ誠と共に歩きだす。

「…で。どうすんだよ？俺ナンパなんかした事ないぞ？お前手本見せろよ。」

「うむ。まかせろ！俺ほどになればナンパなど朝飯前のその前の夜食に戻るほどだ！」

…そのまま母胎まで戻ってくれよ。

訳のわからん言い方で自信たっぷりな誠に、とりあえず手本を見せてもらうことにする。

「見てるがいい！我がナンパの極意をっ！！」

そう叫び、１０ｍ程先のカー〇ルおじさんの横に歩いて行く。

「ふぬぁっっ！！」

奇声を上げ、上着を破り捨てる。

…おい。

そのまま奴は微動だにせず、時が過ぎていく。

…1分。…2分。…3分。

ザ・ワールドかっ！？

通行人の皆さんが固まり、まるで時間が止まったかのような錯覚を覚える。

…いつの間にス〇ンド使いになりやがったんだ？。

「お巡りさ～んっ！！」

取りあえず、動けない皆に変わって俺が通報する。

善良な市民の義務だからな。

「裏切り者ぉっ～！？」

そう叫びながら、半裸で駆け付けた警官と警察犬から逃げて行く奴の姿を見送る。

（達者でな。）

心の中で、せめてハンカチを振ってやる事にする友達思いの俺。

「またお前かっ！？次は逃がさんぞっ！！」

…またって。

「…ふぅ。疲れた。」

なんか１０歳くらい老けた気がするぞ？

（…帰るか。）

馬鹿から解放された事だし、さっさと帰った方がいいだろ。

周りからの視線もいたいし。

通報した俺は被害者だぜ？

気が滅入り、重い足を動かしながら、心の中で誠に呪詛を投げ掛けやる。

（今日の日課の藁人形は怒り３割り増しだからな！）

ードドドドッ！！

（…ん？）

前方から、地鳴りが聞こえて来るような。

「み～こ～し～ばぁ～っ！！」

「…ひぃぃっ！！」

全身ボロボロの誠が、頭を警察犬に噛まれながら、こちらに向かって走ってくる。

『八ッ墓村の祟りじゃ～！！』

的な形相に悲鳴を上げる俺に向かって…。

こう叫びやがったのだ。

「まぁだ、続くのだぁ～～！！！」

第7話：ナンパに行こう。3

「更に続編っ！？」

ありえない事態に戦慄しながら、横を歩くゴミ…。ボロボロになっている誠に目を向ける。

「当たり前だ。まだ、お前は何もしていない。」

「誠の放置プレイなら、嫌になる程味わったがな。」

誠の行為を思いだし、頭が痛くなる。

「失敬なっ！？あれは、れっきとした逆ナン待ちだったのだぞ。」

…ナンパの極意じゃなく、逆ナンだったのかよ。

「俺には変質者にしか見えんかったけどな。」

「ふん。貴様の目はふし穴か？俺を見つめていた幾人ものギャルの熱い眼差しが見えなかったのか！？」

「あまりのショックで立ちすくんでただけだよっ！…大体、誰も寄ってこなかったじゃないか。」

「照れやなベイビー達だったんだよ。」

「…殺してぇ。」

コイツの頭の中身はスッカラカンに決まってる。

「この間、カランコロンと鳴っていたから空ではないぞ。」

「おいっ！？」

…冗談に聞こえないんだが。

「とにかく、次はお前だ！」

そう言い放つと、前方を歩くかなり小柄な女の子を指差す。

「アレを行け。」

「…って、アレはうちの中等部の制服じゃないかっ！？しかも、あんな小柄な子を？ガキだぞっ！！」

「愛に年は関係ないっ！」

「愛してないし…。」

「ぬぅ。煮え切らん奴め！あえて難易度が低そうな子にしてやってるんではないかっ！ゴチャゴチャ言わず行かないと、写真ばらまくぞっ！」

…おのれぇ！

「仕方ない。…すればいいんだろ？」

「うむ。ちなみに、死して屍拾う者無しだっ！！」

「うるさいわっ！！」

誠の暖かい（？）激励を浴び、女の子に向かうも、

…どうすりゃ良いんだよ？

誠の手本はまったく使えんしな。

（ええい！仕方ない。適当にするか。）

入れたくもない気合いを入れ、心を決めて声をかける。

「ちょっと君！何してんの？暇なら俺と…。」

「はい？」

最後まで言わずに、振り返った彼女を見て、俺は気が遠くなった。

「な、な、何してんだぁーー！！！」

「何って…。薫くんにナンパ？」

…最悪だ。織姫と気付かなかった。

「薫くんも、ナンパするんだー？よくするの？いけないんだぁ。」

「ち…違うぞっ！織姫っ！今初めてしたんだっ！！」

しかも無理矢理なっ。

「あ～ん。初めての人を織姫にしてくれたんだぁ☆」

体を自分で抱きしめながら、クネクネとダンスをしている我が妹。

「でも、乙姫ちゃんや月姫ちゃんと違って、本当の兄妹なのよっ！いけないわっ！！」

「いや、…ちょっと織姫？」

なんか盛り上がってきてるぞ。

「コイツは、織姫くんと知って声をかけたんだっ！！」

様子を見てた誠が、いらん事を宣う。

…コイツ織姫と気付いてたな。

「…本当？薫くん？」

…なぜ、瞳を潤ませる。

「うむっ！愛があれば、年の差も血も越えられると力説していたしなっ！」

「捏造だぁーっ！」

「前半部分は本当だろう。」

「貴様が言ったんだろがぁーーっ！！」

俺の魂の叫びは、まったく織姫には届いてない様子で、俺を見つめ言い放つ。

「…本当は知ってたわ。」

「何がだよっ！」

「薫くんが、織姫に淡い恋心と激しい劣情を覚えていることをっ！！」

「なんでやねんっ！？」

「バレてたみたいだな？照れるな御子柴。」

「違うわいっ！！」

「恥ずかしがらなくていいのよっ薫くんっ？織姫嬉しいっ！！」

これはあれか？デートをしなかった復讐か？

「…ふっ。両想いではないか御子柴。」

「話しを聞けぇーーっ！！」

「聞いてるわ、薫くんっ！織姫もホントは愛さえあれば、オールOKよっ！！」

もはや、ピンクの思考に染まった織姫には、何を言っても届かない。

目をギラつかせて、鼻息荒くにじり寄ってくる織姫に、俺は滝のように流れる冷や汗を拭いながら、後退る。

「待てっ。落ち着けっ。」

「さぁ薫くんっ！！二人で桃源郷に旅立つのよっ！！」

「お前は月姫かぁーーっ！！」

飛び掛かる織姫から逃げ惑いつつも着実に、俺の服を剥ぎ取っていく。

「キャーーッ！！やめてぇーーっ！！！」

俺の悲鳴が街に響き渡る中、誠は呑気に笑いかけてくるのであった。

「カップルさん。ホテルは逆方向だぞぉ。」

第8話：月に願いを…。

『ぼくのおひまさま。』

―ふと、思い出す懐かしい言葉に導かれ

『ぼくが、ずっとまもってあげるから。』

―窓から夜空を見上げる。

（ふう。…今日は満月なのね。）

澄み切った夜空に、煌々と輝く自分の名と関係のある天体。

読みかけの雑誌を枕元に投げ捨て想いにふける。

（お兄ちゃんが昔言ってくれた台詞だったわね。）

頭に響き渡った幼い声に、昔を思い出す。

私は、自分の名前が嫌いだった。

私の名前をからかう男の子達は、もっと嫌いだった。

珍しい名前に、目立つ容姿の女の子。

愛情表現の幼い男の子達のとる行動は、当時の私には耐え難いものだった…。

（…お姉ちゃんは何もされてなかったのに。）

今とは違い、引っ込み思案だった私はその結果、毎日泣いていた。
学校が終わると家の裏山にある、秘密の隠れ家に逃げ込む毎日。
（そんな時に出会ったのよ。）
…運命の出逢い。私は今でもそう感じている。
いつもの様に、隠れ家に逃げ込んで来た私は、そこで一人遊ぶ男の子の姿を見つけ立ちすくむ。
逃げたくても、目を閉じたくても体が動いてくれない。
そんな私に気付いた男の子は、引き込まれそうな程の澄んだ瞳を私に向け、満面の笑顔で
「きみだぁれ？てんしさま？」
そう言い、駆けてくる。
…てんしさま？
意味不明な言葉に、戸惑う私にお構いなく続ける男の子。
「ぼく、かおるっていうんだ！てんしさまっ！」
かおると名乗る彼の、誰もが魅了されそうな笑顔に見とれ、私はつい答えてしまう。
「わ、わたしは、てんしさまなんて、なまえじゃないもん。」
「そうなの？すごくかわいいから、てんしさまだとおもった。」

今まで、男の子に言われたことのない言葉に、顔を真っ赤にする幼い頃の私。

意を決して、名前を口にする。

「かぐや？きれいななまえ！じゃ、てんしさまじゃなくて、めがみさまだねっ！」

また訳のわからない事を言う彼は、何かに納得したかの様に、うんうん頷いている。

「…めがみさまじゃないよ？」

「だって、かぐやひめは、おつきさまのめがみさまだもん。かぐやちゃんは、めがみさまっ！てんしさまよりうえなんだよっ！？」

憧憬の眼差しに体中が暑くなる。

（ふふっ…。子供の癖にたいしたナンパ師なんだから。）

「ぼく、きれいなめがみさまと、ともだちになったんだ！」

そんな無邪気な彼とすぐに打ち解けると、初めて出来る男の子の友達に嬉しくなって、家に連れていったの。

家に帰ると、パパとママ、そして知らない大人の男女が慌てているのが見えて、そのうち

「っ！？薫っ！どこに行っていたんだっ！？」

こちらに向かって、血相を変え駆けてくる。

その時に従兄弟だっと知ったの。

翌日からのゴールデンウィークを利用して遊びに来ていた彼等家族。

楽しい時間は、一瞬で過ぎていく。

別れの時、私は泣き叫んだ。

初めて優しくしてくれた、カッコイイ男の子。

初めて友達になってくれた、笑顔が素敵な男の子。

…初めて好きになった従兄弟の男の子。

もう二度と会えないかと、この世の終わりかの様に彼に縋り付く私に照れた表情で

「おはなしなら、かぐやひめが、とおくにいくのにぎゃくになっちゃったね。」

そんな彼が憎らしくて。

「か、かぐやひめよりさきに、どっかいくのはゆるさないんだか

らっ！！」

今までの私じゃ絶対言わないような台詞。

そんな私の我が儘にも、優しい笑顔を浮かべ答えてくる。

「ぼくのめがみさま。」

そう囁く彼は、続けていく。

「はじめてあったときも、ないてたよね？」

（…！？。きづいていたんだ。）

「またあえるよ。つぎにあえたときには…。」

言葉を区切る彼に、目を向けると

「ぼくが、ずっとまもってあげるから。」

（嬉しかった…。当時の私が、どれだけ救われたかわかる？お兄ちゃん？）

貴方はもう忘れているだろう、あの時、あの会話。

あれからどれだけ時が過ぎても、変わらない私の想い。

こうしてまた、共に過ごせる奇跡に感謝しながら貴方を想う。

（もう何処にも行かさない！）

満天の星空と、今は大好きな名前の由来となった月を見上げ…、

私は、願いを口にする。

「月に帰ったとしても、ずっと一緒に…。ねっ？お兄ちゃん♪」

第9話：のどかな日曜日の昼下がりに。

「…これは何ですか？お姉様？」

気絶から目が覚めると、椅子に縛り付けられた俺に突き付けられる、一枚の紙切れ。

「知らない？入籍届けって言うんだよ？」

「…そんな物が何故ここに？」

「私が、薫ちゃんと結婚するからだよ？」

……はぁっ！？

「…まだ17歳なんですが。」

「うん。とりあえず先に記入してもらおうと思ったの。」

可愛い笑顔でサラリと答えてくる乙姫。

…目が笑ってない。

「……誰か、助けてぇっ！！」

半泣きになりながら叫ぶ俺に、熱い眼差しを送り付けてくる。

「ふふっ。家に誰もいないわよ。二人っきりね。」

「お姉ちゃん！」

「あん。乙姫って呼んで！…あ・な・たっ♪」

…駄目だ。イッちまってる。

なんとか抜け出そうと体を揺するが、思った以上にきつく縛られてやがる。

「無駄だよ？今回は自信があるの。縄縛りのスキル上がったでしょ？」

「そんなもんスキルアップせんでもいいわっ！！」

「…好きじゃないの？気持ち良くない？」

「何がじゃあーっ！！」

…あかん。やはり長女。ネジの緩み具合は、他の姉妹と同じだ。

「照れなくてもいいんだよ？」

「照れてない！照れてないっ！！」

「…んもうっ！薫ちゃん私の事キライ？」

…うぅ。そんな目で見るなよぉ。

俺にどうしろと言うんだ？

「ねぇ？薫ちゃん。私の事スキよね？」
「…包丁を突き立てながら聞かないでください。」
…普通にできないのかよ。この姉妹は。
「とりあえず、縄解いてくれ！」
「答えてくれたら、解いてあげるよ？」
…痛い痛いっ！包丁がチクチクとっ！！
「わ、わかったっ！言うから包丁はやめれっ！！」

「うふふっ。じゃあ聞かせて。」
むぅ。仕方ない。言えば良いんだろ？
期待に瞳をキラキラと輝かせる乙姫に、覚悟を決めて告げてやる。
「…好きだよ。」
嘘は言ってない。
「じゃあ愛してる？」

「くっ…愛してる。」

…大事な家族だからな。

「エへへ。嬉しいな♪」

そんなに喜ばれたら、なんか罪悪感が…。

「約束通り、解いてあげるね。」

（ふぅ。やっと開放されたぜ。）

心の中で溜息をつきながら、痺れる体に力を入れる。

「薫ちゃんの愛の告白も終わったし、これ書いてっ。」

そこには先程の入籍届けが。

「えーっと。…さらばっ！」

トテン。

……体が痺れて動かないんですけど。

逃げ出そうとした俺は、床に転げながら、笑顔で寄ってくる乙姫に視線を向ける。

「あらぁ？今逃げようとしたぁ？」

「…ひいぃっ。」

奴の背後に何かが見える。

（蛇だっ。大蛇が見えるっ！！）

蛇に睨まれた蛙の如く、ガタガタと震える俺に言い放つ。

「念のために痺れ薬飲ませてたの♪」

「縄で痺れてたんじゃないのかよっ。」

「今夜が二人の新婚初夜ね♪」

「馬鹿言うなっ！！」

「大丈夫。痛くしないから♪」

「何がじゃあーー！！」

いつもの様に俺の悲鳴が虚しく響き渡る。

「さぁ。あ・な・た♪子供は二人が良いな☆」

「いやぁぁーーっ！！」

世間ではのどかな筈の日曜日の昼下がり…。

絶体絶命のピンチの中、俺はこう叫ぶのだった。

「まずは交際日記からぁっ！！！」

第9話：のどかな日曜日の昼下がりに。（後書き）

初めての後書き。てかお詫び？　連載全話かなりの誤字脱語がある
と思いますが、どうかご容赦を。…えっ？気にする程のレベルの文
章じゃないから大丈夫？　まぁそう言わずに（笑）

第１０話：ラブレターパニック。その１

「薫君っ！これ読んでくださいっ！」

いきなり現れた可愛いらしい女の子に手紙を押し付けられる。

「えーと…。星野さん？」

同じクラスの星野由香。
我が学園で５指に入るくらい人気がある。

ちなみにトップ３は、月姫・乙姫・織姫だ。

…世の中間違ってるな。

「返事は良いです！私の気持ちを知ってくださいっ！！」

そう言い残すと走り去っていく。

「おーい。」

どうしろと？

取り残された俺は渡された物に目を向ける。

（…ラブレターか。）

「ふっ…。俺もまだ捨てたもんじゃないな。」

…正直、誠や月姫達のせいで諦めていたのだが。

「ああ。普通の高校生のようなワンシーン！青春だぁ。」

イソイソと手紙を鞄に忍び込ませ、笑顔を浮かべ家に向かう俺は…。

影から見つめる存在に気付いていなかったのだ。

―御子柴家。

帰宅した俺は、鼻歌混じりに着替えをすませリビングに向かう。

フンフンフーンッ♪

冷蔵庫から麦茶を取り出し一気飲み。

「ぷはーっ。生き返る。」

鼻歌を再開して、振り向いた瞬間に俺にかかる声。

「機嫌が良いのね。何か良い事あったの？」

リビングにはいつの間にか月姫がいた。

乙姫に織姫の姿も見える。

（いつの間に？）

まったく気配を感じさせずに現れた姉妹達。

…まぁいつもの事だな。

そう納得していると、乙姫と織姫からも声がかかる。

「薫ちゃん顔がニヤけてるよ？」

「うん。まるでラブレターでも貰ったみたいに。」

―空間が凍結した。

（ななななっ！？）

寒いを通り越し、凍えるような雰囲気の中焦りまくる俺。

「ららら、ラブレターなんてっ。」

いかん。動揺を隠しきれん。

「何をそんなに焦っているのかしら？」

笑顔で聞いてくる月姫だが、その目はすでに殺人鬼。

乙姫と織姫を見ると彼女達も、殺人鬼の目をしていた。

（…１００人くらい殺してそうだ。）

その視線に怯えながら率直な感想を思い浮かべる。

「失礼ねー。」

「ホントに。」

「１００人も殺してないわよ。」

得意の読唇…いや読心術を使い言う彼女達は、口を揃えて言うのだった。

「「「殺すのは貴方だけよっ！！！」」」

「ひいいいっっ！？」

恐い。恐すぎるっ！！

あまりの迫力に腰が抜けそうになる。

「ま、待て…。はやまるなっ！」

ガタガタガタガタ…。

震える体を何とか気力で押さえつけながら弁明を試みてみる。

「おおお落ち着けっ！」

…いかん。まず俺が落ち着かなくては。

「証拠はあるのかよっ！？」

「お兄ちゃん。持ち物検査してみる？」

「出てこなかったらどうするんだよっ。」

日々虐げられて来た俺は、こんな事もあろうかと鞄は二重底。

「薫ちゃん。心を読んであげようか？」

瞬間的にサイコブロック。

我が心、すでに明鏡止水。

「もうっ。往生際が悪いわよ？薫くん。ネタはあがってるんだからっ！！」

なぬっ！？ネタ…？

その言葉に導かれるかの様に奴は現れこう叫びやがったのだ。

「この裏切り者がぁぁーーっっ！！」

第11話：ラブレターパニック。その2

「…どこからわいてきた？」

叫びと共に現れた誠は、疑問の声をあげる俺に、ビシィッと指をさし更に吠える。

「天知る・地知る・人ぞ知る・お前の悪事を知っているっ！！」

「ノリノリだな。おい。」

俺のささやかなツッコミを無視し盛り上がっている誠は言い続ける。

「貴様っ！こんな可愛い姉妹に囲まれてるのに、更に我らが純情系アイドル・ユーカりんにまで手を出しおってっ！！」

「何だよっユーカりんって！？」

「貴様がたぶらかした、星野由香に決まっておろうっ！！」

…あいつ、ユーカりんって呼ばれてたのか。なんかコリン星から来てそうなあだ名だな。

「いつたぶらかしたんだよ？んな事した記憶はないぞ？」

「シラをきるなーっ！ネタは上がっているのだよっ！」

バサササ…。

奴が投げ捨てた物に視線を向ける。
そこには、俺がラブレターを貰っている写真・写真・写真。
「何じゃこりゃーーっ！？」
「隠し撮り写真に決まっておろう。」
「撮り過ぎだろーがっ！」
「鑑賞・保存・贈呈用だ。」
「あほかぁーーっ！！」
俺のツッコミもむなしく、写真を拾いあげた乙姫が笑顔で話し掛けてくる。
「薫ちゃん。これでもまだシラをきる？」
「くっ。いつの間に撮ったんだよ。」
「私がお兄ちゃんを、日々隠し撮りする用に頼んでたのよ。」
…そういやそうだったな。忘れていたかった。
「パパラッチじゃねぇかっ！」
「そんな品のない名ではなく、‘誠っち’と某育成ゲームみたいに可愛いらしく呼んでくれたまえ。」

「やかましいわっ！」

「こんなにデレデレした顔しちゃって…。もう言い逃れは出来ないよ？薫くん？」

「どこまでプライバシーを侵害するんだよっ！！」

「「「奴隷にプライバシーはないのよっ！！！」」」

「そんな台詞をハモるなぁーーっ！！」

ハァハァ。…あかん。何を言っても通じやがらん。

「「「さぁっ！！説明してもらいましょうかっ！！！」」」

またもや息のピッタリ合った台詞を言い、迫る悪魔超人達。

「説明も何も、ただラブレターを貰っただけだよっ。」

「嘘よっ！あの女狐とヨロシクやってるんでしょっ！？」

月姫…。下品な言い方はやめさない。

「薫ちゃん。結婚前から浮気なんて…。やっぱりきちんと入籍届け書かなきゃダメみたいね？」

「まだ17だと言っただろーがっ！」

「こうなったら先に織姫と既成事実作ろう。薫くん。」

「俺とお前は実の兄妹だーっ！」

こいつらの頭の中には、まともな神経は通ってないのかっ！？

「とにかく、何もないんだっ。もう良いだろっ。」

「騙されないわよ。お兄ちゃん！…いえ、違うわね。可哀相なお兄ちゃんは、あの女狐に騙されてるのよっ！！」

「何がだぁーーっ！」

くっ。もう無理。こいつらとは言語が違うみたいだ。

…異文化コミュニケーションは苦手なんだよっ。

一人苦悩している俺を、何を勘違いしたのか、乙姫が慈しむ様な眼差しを向けながら言う。

「そんなに悩まなくて良いんだよ薫ちゃん？悪の元凶は確保してあるから。」

（悩んでるのはお前らのせいだっーの。）

心の中でツッコミを入れながら言葉の意味を噛み締める。

…元凶を確保？

猛烈に嫌な予感がする中、僅かな希望を胸に抱き彼女達に聞く。

「…何をした？」

「決まってるじゃないっ！」

そう月姫が言い放つと、それに合わせたかの様に誠が連れて来たのは…。

…縄で縛られた星野由香だった。

「えへっ。捕まっちゃった。」

第１１話：ラブレターパニック。その２（後書き）

まだ続きます（笑）　新しい登場人物、そして主要キャラ達全員を絡めるのは初めてでかなり難しいです。基本プロットも何もなく、思いつくままに作る行き当たりばったりな作品ですが、楽しんでくれたら嬉しいです。

第１２話：ラブレターパニック。その３

「捕虜らしくキリキリと歩きたまえ。」

何故か偉そうに彼女に言う誠。

…お前達のアイドルじゃなかったのかよ。扱い酷いぞ？

「星野さん…。」

…ついに一般人まで巻き込みやがった。いや、今までも俺の知らない所でやっていたみたいだが。

（それにしても…）

「なんか縛り方がエロイんですけど。」

とても文章じゃ書けん。

「乙姫スペシャルなの☆」

大きな胸を反らし誇らしげに言う乙姫。

「そんなスペシャルはいらんわっ。」

…もう！こいつらはこの現状に何も思わんのかっ？

「ごめんな？星野さん。…巻き込んじゃった。」

「ううん。私が勝手に捕まっただけ。」

ああ。何て良い子なんだ。こんな目に遇いながらその言葉。

「薫君の、ヌード写真くれるって言うからつい…。」

…なんですとっ！？

「今…なんと？」

「えっ？…だから薫君のヌード写真くれるって言うから、ついてきたら捕まっちゃったの。」

「お前もソッチ側かぁーーっ！！」

しかも簡単に餌づけされやがってっ。誘拐犯に狙われても知らんぞっ。

「エエッ！？二階堂くん、ヌード写真、私も欲しいっ！？」

うるさいぞ。月姫。

「とにかく…。星野さんの縄を解いてやってくれ。痛そうだろ？」

「んー。乙姫スペシャルは、感度3倍なはずだけど？」

「なんの感度だよっ！」

「わ、私はこのままでも大丈夫だよ？」

「何で顔を赤らめながら言うっ！？」

なぜか、俯きモジモジする星野由香。

（…危険だ。よくわからんが、とにかく危険だ。）

「うむ。御子柴よ。ユーカりんは新たな境地に目覚めたのだ。ここは暖かく応援メッセージを電報で。」

「だから何の境地だよっ！しかも目の前にいるのに電報かよっ！！」

「薫くん、お子ちゃまなんだからぁ。あれはね、エス…」

「わあああぁーーっ！！」

織姫が最後まで言う前に何とか遮る。

聞きたくない聞きたくない。まだ、子供でいたいんだっ。

「まぁこれでお兄ちゃんを惑わす悪魔は大丈夫だわ。」

「悪魔はお前達だろーがっ！」

「薫ちゃん…。星野さんは私に任せてね。」

乙姫がそう言い、由香の縄に手をかけていく。

「あぁ。お姉さまっ☆」

「戻って来いっ！星野由香ぁーーっ！！」

あかん。あいつこのままではホントに遠くに行くぞ。…コリン星くらいまで。

「さぁお兄ちゃん！星野さんに私とのラブシーンを見せ付けてあげましょう。」

「ダメだよ。薫ちゃんは今から私に縛られるんだからっ。」

「違うよ。薫くんは織姫と桃源郷に旅立つんだからっ。」

「うむ。では我が輩は全てをフィルムに収めてやろう。そしてどっかに投稿してやる。」

口々に勝手な事を言い出す奴らを尻目に俺は問う。

「結局俺にどうしろと言うんだーっ！」

悪の魔の手に襲われる覚悟が出来た俺は、今日もまた叫び声をあげる。

「もう何でも良いから、オチをつけてくれぇーーっ！！」

たった一通のラブレターから始まった、訳のわからんこのパニック。

心から涙を流す俺を潤んだ眼差しで見つめ、我らがユーカりんは言うのであった。

「これ癖になりそう。薫君。きゃっ☆」

第１２話：ラブレターパニック。その３（後書き）

話しのパンチが…。もうメチャクチャです。

第13話：私の彦星。

「うーん…。今日はどうやって薫くんをイジメようか？」

朝、目が覚めた第一声はそれだった。

『なんでやねんっ！！』

ツッコミが聞こえた気がするが、まだ寝ぼけていると気にしない。

「くす。今日も一日楽しみだなぁ♪」

この家には、大事な兄を狙う肉食獣達が同居している。
つい最近は兄のクラスメートまでがその牙を向けたのだ。

（もともとモテてたんだけど。）

そう思いながらも決意を新たに口に出す。

「織姫が、薫くんを守らなきゃっ！」

友達からは、ブラコンと馬鹿にされる。

…大概は私にフラれた男子達だけど。

（ブラコンの何が悪いの？）

ただ大好きな兄と一緒にいたいだけなのだ。

『なら、イジメはやめろっ！』

また、声が聞こえたがとりあえず無視。

私の両親は仕事が忙しいらしく、ほとんど家に帰らなかった。

参観日も来た記憶がない。

でもそんな時に来てくれるのは、いつも兄だった。

（薫くんも授業あるのに。）

友達と遊びたいだろうに、家に帰ると大体いてくれた兄。

私より先に家に帰り、

「お帰り。織姫。」

と微笑んでくれる。

（たまには…。一緒に帰りたかったんだけどね。）

優しい兄と姉の様に慕う幼なじみ。

親がいなくても彼等がいれば幸せだった。

常に側にいてくれる存在。

自分の半身。

それがいなくなるなんて考えられなかった。

（…あれは5年前。）

兄は突然いなくなったのだ。

いつまで待っても帰ってこない彼。

不在が3日と続き、初めての事に不安で泣き叫ぶ私は、必死に幼なじみがなだめてくれるのだけど、気休めにもならなかった。

この世に独りぼっちになった様な感じ。

大好きな兄に嫌われたのではないかと思う不安に、幼い私の心は押し潰されそうだった。

いつも側にいて、どんな我が儘も笑顔で受け入れてくれる兄。

その大切さを改めて思い知る。

結局、彼が帰って来たのは4日後だった。

埃まみれで、ボロボロになりながら

「お誕生日、おめでとう。」

って笑顔で手渡してくる可憐な白い花。

私は泣きながら、兄にしがみついていた。

―それは、私がテレビの旅番組を見ている時に映っていた、そこでしか咲かない、名もなき花。

綺麗…。と見とれていた私の姿を見ていたのだ。

彼のそんな思いやりに嬉しく思いながらも、一言くらい言ってから行けと怒鳴る。

学校だって休んだのだから。

「ごめんごめん。ビックリさせたかったから。」

そう謝りながら抱きしめてくれる兄に、止まっていた涙がまた溢れ出す。

―いつも優しい兄。

この街に引っ越す事になった時、ホントは私は親の所に行くはずだったんだけど、兄についてきた。

あの４日間は、まさに彦星と逢えない織り姫の心境。

（４日も耐えられなかったのに離れて暮らすなんてっ。）

実の所、乙姫ちゃんや月姫ちゃんみたく恋かはわからない。

でも兄が大好きなことには変わりないのだ。

（やっぱり恋かな？）

例え血が繋がっていても。

人を愛する気持ちは素敵なことだ。

一年に一回…。

天の川ごしにしか逢えない彦星と織り姫。

私はそんなのは嫌っ。

「だって好きなんだからっ！」

そう口にすると、心がすっきりとする。

「誰よりも強い絆で結ばれているのだからっ。」

そう。私と兄は二人で一人。

彦星と織り姫はずっと一緒にいるべきなの。

（そうだっ！）

名案を思い浮かべた私は、制服に着替え、まだ寝ているであろう、愛すべき兄を起こしに行く。

「おはよーのチューしようっ！ううん、起きるまでベッドに潜り込むのも良いかもっ☆」

自然に口元が緩んでくるなか、私は呟く。

「待っててねっ。私の彦星っ。織姫が今逢いに行くからっ♪」

第１３話：私の彦星。（後書き）

一応シリアス。連載全体を見てると、単発、続編、シリアスの法則が…。いつまで続く事やら。…シリアスは受け入れられているのだろうか？

第１４話：アイドルになろう！

「アイドルにならないか？」

……はぁっ！？

貴重な休日に俺を呼び出した誠は開口一番にそう言った。

「毎度の事ながら意味がわからん。」

「だからアイドルにならないかと聞いているっ。」

だから、何でそうなるんだよ。コイツの言う事はホントにわからん。

「アイドルはモテる。＝彼女がワンサカできるっ。」

「あほか…。」

まだ、彼女作りを諦めてなかったのか。

「我らのルックスがあれば、売れっ子間違いなしっ！！女子からは常に熱い声援を受ける毎日だぞっ。」

（黙っていれば、日常生活でも人気はあったさ。入学当初はモテてたしな…。）

今は亡き、過去の栄光に思いを馳せる。

「なんか最後は、熱い声援を受けるんじゃなくて、痛い罵声を受けそうだけどな。」

恐らくそうなるであろう未来のビジョンを述べてやるのだが、まったく聞き耳を持たない馬鹿。

「そんな悲観した未来を見つめて楽しいのかっ！？もっと現実を見ろっ！！」

「お前が見ろよっ！」

おれはお前にツッコミをする為に呼ばれたのか？

「とにかく今からオーディションに行くのだっ！」

「ええっ！？うそっ！？」

そう叫ぶ俺を引きずって誠は歩み始めた。

……

……

……

…来てしまった。

途中何故か目隠しをして連れてこられた俺。

（スター・〇ォーズのテーマソングが聞こえたのは何故だろう？）

なつかしの、某拉致られ系電波番組の若手芸人の心境がわかった気がするなか、辺りを見渡してみる。

（マジにオーディションじゃねーかよっ！）

舞台の上に俺と誠との他に何人かたっている。
胸には番号のついたワッペン。
目の前には、審査委員らしき人達。

（いつの間に、こうなったんだ？）

俺の疑問を余所に、事は進行されていく。

（…全員まとめて審査するのかよ。）

手抜きに思われる様なオーディションにも誠のテンションは変わらない。

「見よっ。御子柴よ。我らに明るい未来を与えてくれる神様達だっ。」

「やかましいっ。人を拉致しやがって！少しは、まともな思考を持てよっ。」

「何をうっ！？」

俺達の漫才（？）を無視し、オーディションは進んでいく。

（ん？あの子は、霧島あずさじゃないか。）

審査委員ブースに座る女の子に目を惹かれる。

今を時めく人気アイドル。

透き通る様に白い肌に綺麗な顔立ち。緩やかなウェーブがかかった長い髪から覗く瞳は少し潤んでいる。。

…メチャクチャ可愛い。

彼女の人気は今や社会現象になるほどだ。

（何でいるんだろ？…まぁ彼女を生で見れただけでもラッキーだな。）

少しだけ誠に感謝していると、俺の自己紹介の番が来た。

（何を言えば良いんだろ？）

心の準備が出来てない俺の代わりに誠が口を開く。

「こいつの名前は、御子柴薫、１７歳。３人いる姉妹に手を出す極悪人だ。」

「…おい。」

いきなり何を言いやがる。

「…そうなんですか？」

ああっ！人気アイドルあずさちゃんが引いてるではないかっ。

「うむ。ついたあだ名は、姉妹殺し。夜な夜な兄・弟と言う立場を利用し悪事に励む鬼畜な奴なのだっ！」

「やかましいわぁーーっ！！」

「ホントの事であろうが？この間乙姫くんとＳＭプレイをしていた。」

「あれは、無理矢理拘束されてたんだよっ！！」

「月姫くんとの生々しい隠し撮りが…。」

「お前達の騙し撮りだろーがっ！」

「織姫くんが、お腹を押さえて“出来ちゃった”と…」

「出来るかぁぁーーっ！！」

ハァハァ…。オーディションの場でなんと言う事をっ。

「…す、凄いんですね。」

何故か尊敬の眼差しを向けてくる美少女アイドル。

「うむ。オーディションに受かった暁には、ブラウン管の中で、兄妹役を君とし、その鬼畜ぶりが全国に放送されてファンに、袋だたきにあうだろう。」

「そんなんあかんやろがぁーーっ！！」

オーディション合格する気ないだろ？俺をイジメて楽しんでるだけだよな。

俺が心の中で誠を１０回くらい殺していると、あずさちゃんが口を開いた。

「…そうゆうのも楽しいかも。」

「なんでやねんっ！」

「ん…。新しい刺激？」

「いらんわっボケェーーッ！！！」

何を言い出すんだ？このアイドルはっ。誠の親戚かっ！

「大体刺激を受けるのは俺だろうがっ！男どもからの痛い刺激をなっ！」

「あははっ上手～。」

「ウケるなぁーっ！」

「うむ。これで合格間違いなしだ。感謝しろよ？」

「するかぁーーっ！！」

もはや何のオーディションかわからない雰囲気の中、何故か誠とあずさちゃんは意気統合し、俺をイジメていく。

血が出そうな程叫ぶ俺にあずさちゃんは言うのであった。

「優しくしてね？お兄様っ☆」

第１４話：アイドルになろう！（後書き）

オチ弱し。単発の中では一番行数が多いかと。２話分くらいあるし。

第１５話：お約束ですっ！！

「…これはいったい。」

冷や汗を流しながら呟く俺。

今は朝だ。

久々に地力で起きる事が出来た俺は自分を褒めていると、隣で怪しく膨らむ物体を発見。

シーツをめくるとそこには。

乙姫がいた。

……。

……。

……。

……。

…はっ！いかんっ！意識がアンドロメダ星雲と地球を往復してしまった。

改めて横を見る。

可愛いい寝顔だ。心が和む。しかし…。

「…なぜに下着姿？」

童顔な顔立ちとは対象的なナイス・バディ。

…いかん。目に毒だっ。

朝の生理現象が勘違いをしてしまう。

「とにかく何とかしなければ…。」

時計を見ると起きてからすでに３０分が経過している。

（宇宙の旅をしたせいで時間をくったな。）

早くしなければ、悪魔達が来てしまう。

とりあえず、揺すって起こそうとした時、寝ぼけているのか乙姫が抱き着いてくる。

「はうわっ！？」

いかんっ！いかんぞぉっ！この密着はっ！しかも素肌でっ！！

（こんな所を見られたらっ！！）

男の悲しい性（サガ）に見舞われながらも、何とか腕から脱出に成功。しかし…。

「お兄ちゃんっおはよー。」

月姫が扉を開けたのだった。

「……。」

「……。」

重すぎる沈黙。北極熊も凍死しそうな程の冷気を感じる中必死で言い訳を考えてみる俺。

すると、そこに織姫が現れ、こう宣いやがりました。

「お約束ですっ！！」

（…お約束はお約束のシーンにおきるからお約束なんだよな。）

織姫の台詞に、軽い悟りを啓いた気になってしまう。

「…何をしているのかしら？」

ゴゴゴゴゴゴッ！

（ひいぃぃっ！！）

いかんっ。奴から闘気が溢れているっ。

「ままま待てっ！事故だっ！勘違いだっ！！」

「へぇ…。そんな恰好で？」

改めて自分を見ると、半裸の乙姫に覆いかぶさり、俺は乱れた寝巻姿。

そして、乙姫は手でグーを作り口元に当て潤んだ瞳で俺を見つめている。まるで子猫みたいだ。

「…おい。始めから起きていたな？」

「薫ちゃん…。お姉ちゃんに欲情するなんて。」

「…こらっ。」

「でも可愛い弟を慰めるのも姉の勤め。…優しくしてね☆」

「何をだぁーーっ！！」

朝っぱらからきつすぎるぞっ。

「あん。怒っちゃイヤ。…縄いる？」

「いらんわぁーーっ！！」

毎度の事ながら、誰も俺の話しは聞きやしない。

どう切り抜けるか、必死に考えを巡らせていると、月姫が俺に近付き言ってくる。

「そんなに溜まっているのなら、一言言ってくれれば…。」

「言って何になるんだよっ！」

「何って。…ナニ？」

「あほかぁーーっ！！」

「とにかく、覚悟は出来ているわね？」

「薫くん。歯をくいしばってね♪」

指をポキポキ鳴らしながら近付く鬼妹達に、腰が抜けてしまいながらも叫ぶ。

「たぁすけてくれぇーっ！」

３０分後。病院に担ぎ込まれた俺は医者に呆れられながら、こう言われてしまったのでした。

「君よくくるね？プレイも程々にね？」

第１５話：お約束ですっ！！（後書き）

毎度の事ながら、ネタを考えずに作るのは厳しいっす。きちんとしなければ…。

第１６話：花の音色に。

また夢を見た。

今より幼い私の夢。

必死に走っている私の夢。

目的地は貴方。

早く逢いたいのに。

声が聞きたいのに。

中々たどり着かない貴方への最終地点。

息せき切る私は、噴き出す汗と溢れる涙を流れる景色に残していく。

気を抜くと止まりそうになる疲れた両の足をもどかしく思いながらも。

私は駆けていく。

もう少し。

あともう少しで。

貴方に逢える。

でも本当は知っている。
だって、これは夢だから。
今まで何度も見た夢だから。
私の願いは叶う事はない。
私の想いは伝わる事はない。
これは夢。
繰り返し見る、悲しい想い出。
愛しい貴方に逢える事は。
夢の中ですら叶わない。
貴方は覚えていますか？
桜舞う街路樹を。
貴方は覚えていますか？
蒼く清んだあの海を。
貴方は覚えていますか？
紅く染め上げた山々を。

貴方は覚えていますか？
白化粧をされた輝く街を。
貴方は覚えていますか？
手を取り合って共に歩んだ季節達を。
時が過ぎても、決して色褪せる事のない思い。
貴方がいなくても、決して揺らぐ事のない想い。
それはとても素敵な、思いと想い。
貴方に届くだろうか。
私の歌は。
貴方に伝わるだろうか。
私の詩は。
切ない夢は。
ときめく夢に。
枕濡らす一人の夜は。
暖かく抱き合う二人の夜に。

朝を迎えればきっとなる。
目を覚ませばきっと来る。
貴方に見せよう。
貴方に伝えよう。
これからは、ずっと一緒なのだから。

夢が終わる。
夢が覚める。
昨日迄とは違う眩しい朝。
これから初める。
物語りの始まり。
期待で胸を膨らませ。
私は駆けていく。
目的地は貴方。
３年かけてたどり着く。

貴方への最終地点。

ほら。貴方はそこに。

すぐそこに。

あの時に逢えなかった。

呼べなかった貴方の名を。

私は勇気を込めて口にだす。

辺りに咲き誇る花達の、花の音色に後押しされて。

「薫ーーーっ！！」

第17話：花の薫が。

「喜べ親友っ！」

本日の授業が終了し、帰宅準備を進めていると誠がいつもの様に騒ぎだす。

「どーした？」

何がそんなに嬉しいのか満面の笑みを浮かべている。

「うむ。我が調査員が秘密情報を手に入れた。」

「俺は、秘密情報より調査員が誰かの方が気になるぞ。」

「えへへ。私でーす☆」

…星野由香。段々と堕ちて行っているな。

「友達は選んだ方が良いぞ？」

「だって写真くれるって…。」

「…おい。」

またか。またなのか？

「うむ。衝撃的瞬間を捕らえた、今世紀最大の作品だっ。」

「何がだっ。いつの間に撮ってるんだよ！俺の人権返しやがれっ！」

ガックンガックンと誠を揺らしながら喚く俺に由香が、どこかウットリとした表情で言ってくる。

「薫君の一人遊びの姿…可愛かった♪」

―ビキィィッ―

世界が凍り付いた。

「…今なんと？」

「エヘッ☆」

「笑ってごまかすなぁーーっ！！」

ちくしょーっ。何なんだよコイツらはっ。

「私にも寄越しなさいっ！！」

どうやって殺そうか、考えていると聞こえる叫び声。

…月姫よ。兄に対する思いやりはないのか？

「お前は、俺の恥を笑いたいのかっ！」

「あら。恥の部分が良いんじゃない。」

何故か“恥の部分”を強調する言い方。

「そんなもん貰ってどうすんだよっ！！」

「決まってるじゃないっ。今夜それで……げふんげふん。」

「死ねぇーーーっ！！」

月姫は途中で言い止めたものの、得体の知れん恐怖に襲われ、思わず叫び声を上げる俺。

「…もうイヤだ。」

傷付き涙する俺に、諸悪の根源が優しく微笑む。

「泣くな親友よ。心荒れたお前の為に朗報を告げてやる。」

（貴様のせいだろうが！）

「なんか明日から転校生が来るみたいだよ？」

怒りのメーターを振り切った俺に構わず笑顔な由香。

「うむ。しかも貴様の3姉妹やユーカりんに匹敵する美少女らしいのだっ！！」

（…俺の3姉妹じゃねーから。）

拳をにぎりしめ語る誠に疲れた視線を送ってやるが、もちろん気にしやがらない。

「この学院に、まだ毒されていない女子が来るのだ。これはもう、明日登校前に待ち伏せして、我らの魅力を語るしかないっ！！」

「お前が、口を開いた瞬間に転校生も近寄らなくなるわっ。」

「では、かくなるうえは拉致監禁っ！？」

「捕まるわっボケェっ！」

「もちろん貴様が実行犯だ。」

「薫君、わたし面会に行くからね。」

「もう黙れっお前らっ！」

「そうよっ黙りなさい！」

「…月姫？」

俺の言葉に続く様に誠達を窘める月姫を、俺は驚きを隠し切れずに見る。

だって、あの月姫だぞ？

「お兄ちゃんは、転校生に興味なんかないし、そんな馬鹿な事しないわっ！」

「月姫…。」

なんか涙が…。あの月姫が俺を弁護してくれるなんて。

「だって、お兄ちゃんは私にメロメロな奴隷なんだからっ！！」

「やかましいわっ！！俺の感動を返せっ！！」

なんなんだよっもうっ！コイツらはっ！！

「もういいっ帰るっ！」

これ以上ここにいたら、脳溢血で病院行きだ。

踵を返し教室を出て行く俺に月姫が思い出したかの様に告げてくる。

「あ、お兄ちゃん。今日なんか、お客さんが来るらしい事をお姉ちゃんが言ってたから。もし先に会っても私達が帰る迄粗相のないようにね？」

（そう言う事は先に言えよな。）

無言で手を挙げ了解の意思を見せながら一人ごちる。

……。

……。

……。

（ふう。今日も疲れた。こんな状態でお客さんとやらに会いたく

ないなぁ。）

心の中でぼやきながら歩く帰り道。

この街に来てからは、毎日がこんな状態だ。

退屈はしなくてすむがな。

（それに、お客さんとやらも、乙姫にだろ。気にする事もないか。）

そう考えると、気持ちが楽になり歩く足音にも元気さが滲み出てくる。

「転校生…か。」

思わず口に出る言葉。

別に美少女だからと興味があるわけではない。

いや、あるのだが、それより俺自信が、元転校生だ。転校する時の不安はよくわかる。

「仲良くしなきゃな。」

そう思いながら、顔をあげると家が見えて来ていた。

家の前にある道には、色とりどりの植物が植えられており、今は見事に咲き誇っている。

風に運ばれてくる花の香に、何故か懐かしいさを感じてしまう。

（…あいつが昔言ってたっけ？）

『私は、花が奏でる美しい音。そして、その音に乗って運ばれてくる花の優しい薫が薫ね。』

（笑顔でクサイ台詞を言いやがって。）

思わず勘違いしてしまいそうな台詞だし。

苦笑しつつ鞄から鍵を取り出している時。

俺を呼ぶ声が聞こえた。

「薫ーーーっっ！！」

第17話：花の薫が。（後書き）

前回の流れを組んでます。次の回から、彼女がきちんと登場ですな。
…この先どうしよー？

第１８話：幼なじみ。

「か…のん？」

振り向くと、そこには風に舞う花びらに囲まれる様に、一人の少女がたっていた。

最後に見た時より、少し大人になった顔立ち。

しかし、勝ち気な瞳は昔と変わらず俺を見つめている。

―これは夢か？

いるはずがない、逢えるはずもない少女の出現に軽く目眩に似た感覚に襲われてしまう。

ぎゅっ。

呆然と立ちすくむ俺に、駆け足で近付き、いきなり抱きしめてくる少女に、やっと意識が覚醒する。

「ななな！」

「うふふっ。」

抱きしめられる感覚に動揺している俺を可笑しそうに見つめる瞳。

「久しぶりだね？薫。」

「…ホントに花音なのか？」

「くすっ。ひどいなぁ。私の顔忘れちゃった？」

…忘れるわけがない。

あれからずっと気になっていた存在。

ついこの間は、夢に見たほどなのだから。

「わわ忘れるわけないだろっ！全然変わってないしっ！」

「私変わってない？」

「あ…あぁ。」

焦るあまりドモル俺を見つめ花音は続けていく。

「薫は変わったよ？」

「…えっ！？」

「前よりも更にカッコ良くなった…。」

彼女はそう言うと、俺に抱き着く腕に力を込める。

（ななっ！？何なんだっ！？この展開はっ！？）

遠距離恋愛中のカップルみたいな甘い雰囲気に、誠達との馬鹿に慣れきった俺は、ただただ焦るばかりだ。

「と、とりあえず離れてくれないか？ひ、人の目もあるし。」

「ん…。わかった。」

少し名残惜し気に体を離す花音を見ながら、やっと余裕が出てくる。

（―綺麗になったな。）

率直な感想だ。昔から整った顔立ちをしていたが、成長したぶん更に美しくなっている。

「なぁに？私に見とれてるの？」

「ばっ馬鹿言うなっ！」

嬉しそうに微笑んでくる花音に、つい声が大きくなってしまう。

（いかん。このままでは話が進まんっ。）

速くなった動悸を無理矢理鎮めつつ口を開く。

「…とにかく久しぶりだな。」

「…うん。」

「色々と聞きたいことがあるけど…。どうしてここに？」

「薫に逢いに。」

「い、いや冗談は…。」

「冗談なんかじゃないっ！」

「花音？」

「冗談で、連絡先も行き先もわからなかった相手の所に来るわけないでしょっ！！」

「……。」

俺の言葉に気が触れたのか、大声をあげる花音の剣幕に押し黙ってしまう。

「…ごめんね？いきなり怒鳴っちゃって。」

「いや…。」

僅かに出来た沈黙に、気まずさを振り切るかの様に、頭を軽く振ると花音は話を続けていく。

「ホントはね。今日からここに住むの。」

「…えっ！？」

そう花音が指差す所は…。

「まだ乙姫さんから聞いてないんだよね？」

だって、そこは…。

次々に襲う衝撃に、もはや言葉を失ってしまった俺に、彼女は透き通る様な声を一段高くして俺に告げてきた。

「今日からヨロシクね？幼なじみさんっ♪」

第１８話：幼なじみ。（後書き）

ギャグがなかった…。どうも花音が絡むと。もっとも感動の再会にギャグもアレですが。さて、薫君は、これからどうなるのでしょうね？

第１９話：少女の告白。

「…で？説明してくれるんでしょうね？」

ここは御子柴家のリビングなのだが…。

目の前には仁王立ちした月姫。ソファーに座る俺の横には俺に腕を絡めている花音。

「な、何をでしょうか？」

冷や汗が流れていく中、乙姫と織姫を見ると、こちらは少し困った表情を浮かべているのがわかる。

「貴方達のイチャツキぶりのことよっ！」

怒ってる。そりゃもう怒髪天をつくってくらい。てか、髪がウネウネと動いてるよ。

（何故こうなったんだろう？）

月姫から放出されている闘気を肌に感じながら、記憶を掘り返してみる。

皆が揃った食卓で、改めて花音が紹介され、こちらに来た事情を説明した。

偶然にも、花音の父親と月姫達の父親が仕事先で知り合い、俺の情報を得たらしいのだ。父親からそれを聞いた花音は、皆の制止を振り切ってここに来たわけだ。ご丁寧にも月姫達の両親を味方につけて。

そして花音がこの家に来る事になったのは、昨日。乙姫が父親か

ら連絡を受けたのだ。俺を含め知り合いがいる所に住んだ方が良いとの事で。

（なんていい加減で、早い展開なんだ。）

花音達の行動には呆れてしまう。再会出来たのは嬉しいのだけどね。

織姫は、花音に会えた事が余程嬉しかったらしく、食事中もずっとニコニコとしてたっけな？

（まぁ、それは良いんだけど…。）

食事が終わり、一服をしている時にいつもの様に月姫が俺にからんできた。それを見た花音が割り込み、今の状態に至るわけだわ。

（…俺別に悪くないやん。）

そう思うのだが、口に出せるわけもなく。…おれって弱いから。

「わ・た・し・の、お兄ちゃんから離れてくないかしら？」

こぇーっ。超こぇーよっ！なんか部屋中から、ラップ音が聞こえてるぞっ。

「ごめんなさいね？3年ぶりの再会だから、気分が高まっちゃって。」

全く悪びれた様子もなく、むしろ更に抱き着いてくる花音。

ビシィィッ！

はうっ！？ゆ、湯呑みに何故か亀裂がっ。

助けを求めもう一度、乙姫と織姫を見るが、怒りと困惑が半々みたいな表情だ。

乙姫は花音を引き受けた立場、織姫は姉とも慕う大好きな幼なじみと言う立場がある為だろう。

（てか、半分は怒ってますのね。）

ピリピリとした空気の中、どうしたものかと悩んでみるも何も思いつかん。

大体、花音はこんな事するキャラじゃないはずだが…。この3年の間に変わったのか？

うんうんと唸っていると花音が俺に向かって口を開く。

「薫…。この子、月姫ちゃんと付き合ってるの？」

ぶはっっ！！

いきなり何を言う。吹き出してしまったではないか。

「つ、付き合ってなんかねぇよっ！てか、誰とも付き合ってないっ！」

俺のその言葉に、花音は笑顔を浮かべ、月姫は顔を歪ませる。乙姫や織姫も悲しそうな顔だ。

（…何でそんな顔するんだよっ！）

いや、本当はいくら馬鹿な俺でもわかっている。わかっているけど…、まだ俺は…。

悩む俺をよそに、花音は軽く深呼吸すると、よく通る声である言葉を口にした。

そりゃあもう、核爆弾並みの破壊力のある言葉を。

「私は薫を愛しているっ。私を今日抱いてほしいの。」

第１９話：少女の告白。（後書き）

ついに２０部ですな。今回のタイトルは久々に文中からの引用はしてません。織姫のお誘い。以来かな？…だから何？って感じですが。

第２０話：少女の想い。

「……っ！？」

あまりの衝撃に言葉がでない。花音は月姫達みたいに冗談でこんな事を言ったりはしない。ぎこちなく顔を周りに向けると姉妹達も固まってしまっているのがわかる。

「私は、薫を愛しているわ。私を抱いてほしいの」

もう一度花音が告げてくる。その顔は真剣だ。

「「「何を言ってるのよっ！？」」」

繰り返される言葉に呪縛が解けたのか、見事にハモらして悲鳴にも似た叫び声をあげる彼女達に俺は思わず頷いてしまう。

確かにその通りだ。いくら何でも、久々に会った人間に、しかもこれから世話になる初対面の彼女達がいる前で言う台詞ではない。

「何って、聞いたそのままよ。愛の告白。」

「いきなり抱いてだなんてっ！」

さすがに我慢できないのか乙女は非難めいた口調で責めるのだが

「あら？貴女達も似たようなことを言った事あるでしょう？」

「……っ！？」

「図星みたいね？」

花音のかまかけに、見事に引っ掛かり沈黙する。

「…このままじゃなんか私、嫌な女になるわね」

軽く溜息をつき、

「でもね。薫が欲しいのっ」

「……」

「ずっと側にいた人が急にいなくなる不安わかる？連絡先も行き先もわからない。…やっと逢えたと思ったら綺麗な年頃の女の子達と一緒に住んでいるなんてっ！」

今だ沈黙している俺達に花音は口調は段々熱くなっていく。

「…ホントはね、いきなり抱いてなんて言うつもりなかった。でも不安なのよっ！」

「花音…」

「私達は、３年ブランクがあっても１０年以上共に過ごした幼なじみ。そこいらの恋人や夫婦より余程お互いを知ってるわ。…知らないのはＳｅｘだけ。貴方の温もりを私の物にしたいの」

言葉が出ない。花音は真剣だ。

「お互いの存在を今以上に結び付きある物にしたいの。心にも体

にも刻み付けたいの」

こんな展開になるなんて思ってもみなかった…。ただ逢えただけで俺は満足してしまってたのに。

「くすっ。」

思い悩む俺達の沈黙を打ち破るかのように花音が軽く笑う。

「？」

「なんてね？」

「…はぁっ！？」

「あははっ何似合わない暗い顔してるのよっ」

突然の変わり様に唖然とするしかない俺に変わり、織姫が口を開く。

「花音ちゃん…今の冗談なの？」

「今のは本気よ。私の想いを素直に言っただけ」

また真剣な表情に戻り話す。

「でもね？薫を急かすつもりも困らせるつもりもないのよ。ただ、薫に私の本気を知っていて欲しかったの。それに…」

一旦区切り、乙姫・月姫・織姫と順に視線を送り、

「これは宣戦布告よ。貴女達の前で言う事により、引き返せなくするための」

（…綺麗だ）

堂々と宣言する久し振りに逢う幼なじみの姿に見とれてしまう。その俺の姿を見たのか

「わ、私だってずっと好きだったんだからっ！」

「薫ちゃんへの想いは負けてないっ」

「いくら花音ちゃんでも薫くんは譲れないのっ」

口々に姉妹達が騒ぎだす。それを楽しそうに見ながら花音は

「モテモテだね？」

と冷やかしてくる。そして困り切った俺に軽くウィンクするとこう囁いてきたのだ。

「逃がさないから…。何なら本当に今日部屋に来る？」

第２０話：少女の想い。（後書き）

もう何がなんだか…。話しが上手くまとまらないっす。

第２１話：真・いつもの昼休み。

「こぉのっバカチンがぁっ！！」

教室はおろか、学校中に響き渡りそうな声で俺に迫る誠。今は昼休み。いつもの様にダベっていたのだが。

「…何がだ？」

「貴様ぁッ！惚けるのも大概にしたまえっ！」

唾を撒き散らしながら俺に吠えてくる。汚いなぁ。まぁ、理由はわかっているんだけど。

「３姉妹やユーカりんだけでは飽きたらず、転校生にまで毒牙にかけおってっ！」

「落ち着け…誠」

「イチャついてる姿見て落ち着けるかぁーっ！」

…イチャついてなどいない。いないのだが。

視線を横にやると俺に腕を絡めている花音。俺と目が合うと、ニコッと微笑んできた。

（うわぁっ）

危険なほどに可愛いかった。月姫がこの場にいなくてよかった。

「言っただろ？花音は幼なじみなんだよ」

「けしからんっ！姉・妹の次は、幼なじみ属性かぁっ！」

「何だよそれっ！」

また出た訳のわからん台詞に思わずツッコミを入れてしまう俺。

「ふっ今更惚けるのもやめたまえ」

「…惚けてはないつもりだけど」

瞬間、誠の目がクワッと見開き、

「貴様程、萌の要素に恵まれた生活をしている奴を我輩は知らんっ」

…萌ときましたか。

「実妹に、従姉妹で義理の姉と妹、学園の天然系純情アイドル、そして幼なじみっ！貴様何処まで強欲なのだっ！？」

「うるさいわっ！！」

「はっ！？貴様まさか…それだけでは飽きたらず、家ではネコミミなどを付けさせているのでは？」

「やかましいっ！」

ワナワナと震えながら言う台詞かよ？

「…我輩的には、ウサミミを希望するのだが」

「本格的に黙れっ！！」

花音が目をまんまるく見開いてるではないか。こんな生活を送っているのを知られたくなかった。

「こいつは軽く狂犬病にかかってるんだよ」

「どちらかと言うと狂牛病だがな」

「…お前が言うと本当に聞こえてくるから止めろ」

「中々楽しそうな、学園生活送っているのみたいね？月姫ちゃん達以外にもモテてるみたいだし？」

そんな冷えた目で見ないでおくれ。最低人間な気になってくるから。

「うむ。御子柴は日々萌に精進しておるからな。萌要素を含んだ相手には容赦なく欲望の魔の手を向けるのだっ」

「いつ精進して、いつ魔の手を向けたよっ！」

「毎日、萌ビデオを見ながら○○タンハァハァと言うのが日課なほどだっ！！」

「人の話を聞けぇぇーーっ！！」

相変わらず話しが噛み合わん。大体、萌ビデオってなんだよっ！あるのか？そんなの？

「すまんな花音。転校初日からコレで」

ホントに申し訳ない。この街に来たのが運の尽きと諦めてくれ。

「楽しいよ？薫の友達」

何て優しいお言葉だ。君が天使に見えてくるよ。そう一人感激していると、今だ萌について熱く語っていた馬鹿が、感激をぶち壊す様にいきなり叫び出やがった。いつもの様に病的に。

「萌ぇーーーッ！！」

第２１話：真・いつもの昼休み。（後書き）

何が真なのやら（笑）本当はもっと長く、シリアス込みでするつもりだったのですが、燃え付きました。ここ何話かギャグなかったし良いかな？

第２２話：萌救世主伝説！萌は地球を救う。

「萌ッ萌ッ萌もへもへっ！」

「やかましいわっ！変態っ！！」

いきなり何を叫びやがる。ビックリするだろ。しかもなんか最後は萌じゃなかったし。

「何騒いでるの薫ちゃん？」

ん？と声がした方を見ると珍しく乙姫が来ていた。　誠は乙姫を見て騒いでたのか？しかし、

「何故に眼鏡？」

乙姫が眼鏡をかけていた。中々似合っている。

「貴様ッ御子柴ぁッ！」

萌発作から立ち直ったのか誠が俺を呼ぶ。

「何だよ？まだ何かあんの？」

すると乙姫をビシィィと指差し

「やはりこんな危険なプレイをっ！！」

「意味わからんわっ！」

…萌発作はまだ治ってなかったか。現代医学では完治不可能かもな。

「これは伝説の眼鏡っ娘ではないかぁっ！！」

「そんな伝説はないわぁっ！！」

「ロリータフェイスの巨乳の義姉に眼鏡をかけさせるとはっ！」

「少しは話しを聞けよっ！」

「これでチビッ子織姫くんに一人称をボクにさせれば立派なボクッ娘っ！禁断のコラボの出来上がりだぁーっ！」

「もう色んな意味で死ねぇーーっ！！」

「萌は地球を救うのだっ！」

…あかん。頭が割れそうだ。恐るべし萌ウィルス。

「…馬鹿はほっといて。乙姫なんか用でもあったのか？後、眼鏡は？」

「用と言うか、花音ちゃんが薫ちゃんに変な事してないか見に来たの」

その言葉にピクッと花音の眉が動く。

「眼鏡は飾りだよ。たまには良いかなって」

「たまにではなく毎日頼みたい。萌隊長として」

ガンッ！とりあえず殴ってみた。

「…痛いじゃないか」

「お前の頭が激しく痛いわっ！」

「むう」

「乙姫さん、わざわざ来て頂く事もなかったのに…」

むぎゅっ。

…何故に抱き着く花音。乙姫が般若の顔になっているじゃないか。

「花音さん？…乙姫さんを挑発するような事は…」

「可哀相に薫ちゃん。抱き着かれるなら私の胸の方が良いでしょうに」

そう言うと自身の胸を強調するかのように、両腕で押し上げる。

「くすっ。無駄に脂肪がある人に抱き着かれたら暑苦しくなると思いますけど」

「あら、誰の事かしらぁ？」

「さぁ？」

「「うふふふっ」」

（ひいぃっ）

恐いっ。恐すぎるぅっ。二人が発する魔闘気で死んでしまいそうだっ。

「どちらが真の萌リストかの勝負だな。勝った方が御子柴を好きに出来る」

「何を言い出すんだ貴様ぁーーッ！」

俺の叫びがコダマする。萌リストってなんかデュエリストみたく言いやがって！

すると俺の叫びに反応するかの様にガシッ！と二人がいきなりお互いの腕を掴みとった。

「あら花音ちゃん。この手はなぁに？」

「乙姫さんこそ？私につかまらなければならない程お年なのですか？」

（戦場だ…。もうじきここは戦場になるっ）

「ふははっ。闘うが良いっ！更なる萌の高みを目指してっ！今はまさに世紀末っ！萌救世主伝説を造りあげるのだぁっ！！」

「これ以上あおるなぁーっ！！後、すでに新世紀入ってるわぁっ」

しかし俺の親切なツッコミも虚しく。全ては手遅れだった…。破壊されていく教室。巻き込まれる生徒。俺はそれを恐怖のあまり掃除用具入れの中に避難し涙を流しながら見ていた。当然の如く、巻き込まれ窓から落ちていく誠の叫びを聞きながら。

「我が萌に一片の悔い無しっ！！」

第２２話：萌救世主伝説！萌は地球を救う。（後書き）

えーと。馬鹿です（笑）とりあえず花音も壊れキャラにして行こうと試みてみたんですが。これが限界ですな。

第２３話：真・のどかな日曜日の昼下がりに。

「ふっ…。こんな事だろうと思ったぜ」

織姫が差し出したクッキーを口にした俺はそう言うと意識を失った。

「……。……くん」

誰かの呼び声で目を覚ます。そこは…。

「地獄だったとさ」

「何ブツブツ言ってるの薫くん？」

「目の前の風景に対して言ってるんだよ」

怪しげな音楽が流れ、全体的にピンク調な部屋。真新しいベットに拘束されている俺。目の前には何故か下着姿の織姫。地獄だ…。

「どちらかと言うと、今から天国に行くんだけど？」

「やかましいわぁっ！！」

何を考えとるんだっ。このバカチンはっ！

「今日は邪魔者がいないから…ね？」

「…ね？じゃねーっ！」

「さぁ、めくるめく快楽の世界に旅立ちましょう」
「ドコニモイキタクアリマセン」
ああ。恐怖のあまり口調が。
「ちなみに、片道切符でかえって来れないから♪」
「いやぁーっオカーサーンっ！！」
「男が言う台詞じゃないよ？」
笑いながらベットに近づく織姫。目が笑ってねえ。これは肉食獣の捕食時の目だ。
「だーっ。ストップ！ハウスハウスッ！！」
「獣みたいに…あっでも今は獣か？せいじゅ…」
「きやぁーーっ！！」
…危ねぇ。何とか最後までは言わさなかったぞ。
「もうっ。雰囲気台なしじゃん」
「元からないわっ！」
何をほざくんだ、この娘はっ。

「観念しなさい。この状況で逃げられるとでも？」

「まま待てっ！血迷うなっ！話しあおうっ！」

必死な俺の説得が届いたのか織姫は顔を伏せ話しだした。

「ごめんね…。でも織姫焦ってるの。花音ちゃん来てから薫くんにベッタリだし、乙姫ちゃんや月姫ちゃん達だって…」

「…織姫」

「だからって…こんな事いけないよね？やっぱり」

「……。」

今だ俯き僅かに肩を震わせている織姫。後悔しているのかその声には涙が混じっているように聞こえる。しかし…

「では何故服を脱がすのですか？」

「…あ」

「…あ。じゃねーっ！」

いかん。コイツの頭はもはや桃色パラダイス。

「もう手遅れよ」

「何がだ？」

「薫くんに媚薬をのませてるから」

…は？

「誠くんがくれたの。人体実験に使ってくれたまえって」

「あんのボケェーーッ！！」

またアイツかっ。何だよ人体実験って！

「待てっ！俺達は兄妹だっ！」

「ふっ。所詮は男と女」

「お前はまだ、子供だろっ」

「薫くんと二歳しか違わないよ？」

ダメだーっ！どこで育て方間違えたんだっ？

「おおお落ちてけっ！」

「くす。薫くんは落ち着いてないみたいだけど？」

キャー。一点を見つめないでっ！媚薬の馬鹿野郎っ。

「さぁ、レッツゴー♪」

「何処にだぁーっ！？」

平穏とは程遠い日曜日の昼下がり、前にもこんなのあったなぁと思いつつ、俺は叫ぶのであった。

「助けてーっ！ドラえ〇ーん！！」

第２３話：真・のどかな日曜日の昼下がりに。（後書き）

またまた真（笑）ボケボケな文は楽ですな。

第２４話：我ら、萌☆親衛隊☆その１

「天誅ーーっ！！」

そう叫び、いきなり木刀で殴り掛かってくる男子生徒。

「…何だ？」

そう口に出しながらも、左足を軸にし右足を半回転。つられるように半身になる体勢で木刀をやり過ごすと、男子生徒の伸びきった腕、正式には手首を左手で捕まえ捻りながら、更に自分の体を半回転。すると

「あら不思議。簡単に転がるのでした」

ふん。こう見えても御子柴家の長子なんだからな。…しかし

「何故襲う？」

その言葉に反応するかの様にゾロゾロと１０人程現れる。皆、頭に鉢巻きをしめなにやら書いてある。

『萌☆親衛隊☆』

（……。）

馬鹿だ。萌ウィルスに汚染された奴らがここにいる。　衝撃のあまり呆然としていると、

「ふはははははっ！」

聞きたくない笑い声が…。幻聴と言う事にしておこう。

「ふはははははっ！」

（今日の晩飯なんかなぁ。）

軽く現実逃避をしていると

「ふははひゃっゲホゴホッ」

「あ…むせた」

「ゲホッ。我輩を置き去りにするな親友。放置プレイならもっとわかりやすく…」

「やかましいわぁーっ！！」

ヨダレを拭きながら恨めしげに俺を見つめる誠。

「毎回毎回毎回っ！何なんだよっ！！」

「見てわからんか？彼等は〈萌☆親衛隊☆〉そして我輩は団長であるっ」

「煩いわっ！このウィルスバグ野郎っ！大体何故襲うんだよっ」

「ふっ。痴れた事を…」

「何だよ？」

「天誅だよコレはっ」

…意味がわからん。

「惚けるのも大概にしたまえっ。貴様がいかに重大な過ちを犯しているか気付いていない訳なかろうっ」

「どちらかと言うと、重大な過ちはお前達の存在の気がするが？」

「ふん。勝者の余裕か御子柴？」

「だから何がっ！？」

「貴様が、我らが命、萌っ娘を全て手中におさめている事がだよっ！」

「アホかぁーーっ！！」

何なんだよっコイツらはっ。ブラック○ャックでも治せんくらいの馬鹿はっ。

「貴様に哀れにも毒された我らがヒロイン達を取り戻すのだっ！」

頭が痛い。こんなのと友達で良いのか俺よ？

友人関係の見直しを真剣に考えていると取り巻き連中の声が聞こえてくる。

「乙姫ちゃんのナイスボディをあの破廉恥野郎から…」

「ユーカりんの天然ぶりを汚させないっ」

「俺にも幼なじみをぉっ！」

「かか月姫さまぁーっもっと撲ってーっ！」

「おお織姫タン、ハァハァ」

「やかましいわぁっ！最後らへんは明らかにおかしだろがっ！！」

危険だ。危険過ぎるぞ。

「ふっ。彼等の心の叫びが聞こえたかね？」

「…あぁ。ホントに心の叫びだったな」

嫌な心の叫びだよ。まったく。

「「「「よって貴様を粛正してやるーっ！」」」」

どっかのＭＳ乗りみたいな事を叫び、ジリジリと近づきくる変態達。あまりの異様さに、さすがに気押されし、某カードのＣＭみたいに焦る俺。

（くっ。どうする？どうするよ俺？）

すると心を読んだかの様に叫ぶ誠の声が。

「続きまーすっ！！」

第２４話：我ら、萌☆親衛隊☆その１（後書き）

萌リターン（笑）

第２５話：我ら、萌☆親衛隊☆その２

「さぁ観念したまえ」

ジリジリと迫りつつある誠と下撲達。出来れば近づきたくない面子だ。

「くっ…」

「おとなしく捕まりたまえ。今なら優しく扱ってやろう」

「信じれるかっ」

いきなり木刀でしかけてくる奴らだぞ？

「我輩の半分は優しさで出来ているのだ」

「嘘つけっ」

頭痛薬みたいなキャッチコピーを言いやがる。

「団長」

どうやって切り抜けるか考えていると、取り巻きの一人が何やら誠に耳打ちをしている。

「ふむ。成る程。やってみたまえ」

「ははっ。身に余る光栄」

何なんだこのやりとりは？この学校は入学志願者を改める必要があると思うぞ？

「おいっ！貴様っ！」

「何だ？」

話しかけてくる取り巻きA。なんか緑色の汗をながしている。

「我らは慈悲深い。貴様次第では見逃してやっても良いぞ？」

何で偉そうに言う？周りの取り巻き達も頷いてやがる。

「これは…そう取引だ」

「…応じる必要があるのか疑問だが、まぁ言ってみろ」

「素敵アイテムを寄越せ」

「…はぁ！？」

何だそれは？どこぞのパワーアップアイテムだ？

「貴様とていくつか所持しているだろう？」

「意味がわからんのだが」

その返答に気を害したのか叫びを上げる。

「とぼけるなっ！彼女達の使用済みマル秘アイテムだよっ！！」

「死ねーーーっ！！」

全力でハイキック。

「ああっ！萌グリーンっ！？」

錐揉み状態で飛んで行く取り巻きAに他の連中が声をかけているのが聞こえる。…グリーンて。

「何をするだっ。今更出し惜しみをっ」

「やかましいわっ！」

叫ぶ俺に次々と変態達の声が浴びせられる。

「俺達だって素敵アイテムが欲しいんだっ！」

「乙姫ちゃんの素敵リップが欲しいっ！」

「ユーカりんの素敵リコーダーっ！」

「花音ちゃんの素敵バスタオルっ！」

「かか月姫さまのぉっすす素敵ブルマぁーっ！」

「おお織姫タン、ハァハァ。」

「だからお前はおかしいってーーっ！！」

取りあえず最後とその前に口を開いた奴を殴り飛ばす。

「へぶうっ！」

とか言いながら地べたにはいつくばりがったそいつを踏み付ける。

「あぁっ！目をつぶり月姫さまに踏まれてるイメージをしなければっ！」

「早くクタバレ」

ゲシ。おっピクピクしてるぞ。

「むう。やはり我輩でなくては無理か」

「ラスボスみたく言うな誠」

「どうしても我らの野望を阻止するか？」

「だから、どこのラスボスだよ」

「萌王様だ」

……。もう無理だなコイツは。なんか涙が。

「なんだその憐れみの瞳は？萌勇者よっ」

「もうなんか取りあえず死ねーーっ！！」

俺の叫びと共に放たれた拳を受け取り巻き達を巻き添えに倒れて

いく馬鹿。

「…なんか本当に悪は滅びたみたいな感じだ」

脱力しつつ言う俺に誠が最期の力を振り絞り声をだす。それこそ悪の大王みたいに。

「これで勝ったと思うな。第二・第三の萌リストが貴様を…ぐはぁっ！」

第２５話：我ら、萌☆親衛隊☆その２（後書き）

オチ弱し。なんかもうグタグタです（笑）取りあえず完結に向けて進まなければ…。

第２６話：恐怖！蜘蛛女。

「……。」

目の前の現実に、心がついていかん。どうすれば良い？目を逸らさなければ逃げなければいかんのに動けない。

ここは脱衣所。目の前には裸の月姫。もうバッチリである。

「き…」

「きゃあーーっ！！」

月姫が口を開く前に、俺は乙女みたく悲鳴を上げた。

「…お兄ちゃんがなんで悲鳴あげるのよ」

「いやつい。てか…隠せよ」

「チラチラ見ないで堂々と見たら？」

腰に手をあて仁王立ちの月姫。お前悲鳴あげかけたくせに。

「いや、すまん！」

呪縛が解けた俺は踵を返そうとするが

「逃がさないよ？」

あ～れ～。風呂場に入れられてしまった。

「月姫さん？」

何を考えて…いや、考えてる内容はわかるが、

「もうっ話す時は相手を見なきゃ失礼でしょっ」

「見れるかぁっ」

「…見る価値もないんだ」

そんな悲しげな顔をしても騙されんぞ？

「ほらっ、私が裸なんからお兄ちゃんも脱ぎなさいよ」

「むちゃ言うなっ！」

チクショー。逃げたくても扉前に立たれたら無理じゃないか。腕力じゃかてんし…。

「……脱ぐの無理かも」

なぜか急に顔を赤らめモジモジする月姫。

「？よくわからんが、今頃恥ずかしがるなら最初からするなよな」

極力月姫を見ない様に声をかけるが、どうも奴は上の空。

「…なんなんだよ？」

「ズボンぬげないでしょ？今」

「脱ぐ気は最初から…」

いや、待て。気づいてしまった…。ある違和感に。

「お兄ちゃんのお兄ちゃんが引っ掛かって脱げ…」

「みなまで言うなぁーーっ！！」

あぁっチクショー悪いかよ！俺だって健全な高校生なんだよバカヤロー！

「そんなにヘコまなくても…苦しいなら私が…」

「もう何も言うな妹よーーっ！」

そろそろ正常な世界へ戻らなければ死んでしまうっ。体に毒だ。なんだかんだで月姫は魅力的なのだ。

「部屋に帰らせてくれ」

「帰って一人遊びするなら、ここで二人遊びを…」

「わぁわぁわぁーー！」

くっ禁止コードギリギリの台詞ばかり言いやがって！ここはもう、強行突破しか！

覚悟を決め目をつぶりながら（紳士だからな）月姫にアタック！…が、これがいかんかった。

「のわっ！？」

「きゃっ！？」

目をつぶってたせいでつまずき月姫を押し倒す最悪の結果に…。

「あん」

「変な声出すな！抱きしめるな！」

ヤバイヤバイヤバイぞぉ～！月姫の肌がっ素肌がっ脳ミソ溶けそうだっ。

「あぁっお兄ちゃんに犯されちゃう…」

「するかーっ逆にされそうじゃっ！」

「そっちのが良いの？」

「違～うっ！」

「あん。お兄ちゃんのお兄ちゃんがアタックしてる♪」

キャー。それ以上言わないで。武士の情けじゃ！

「ふふふ。逃がさないわよ？」

利用前に確認せずに風呂場に来たのが運の尽き。

蜘蛛女のごとく手足をワシワシと動かし、俺を補完する月姫。脳

ミソ溶けそうな状況に俺は最後の力を振り絞り叫んでやった。

「ご利用は計画的にぃー！！」

第２６話：恐怖！蜘蛛女。（後書き）

いやぁーほぼ毎日投稿してたのに、かなり間があいてしまった…。
もう忘れられたかな（＾ー＾；

第27話：子供の国。

「出来ちゃった♪」

織姫に部屋に呼ばれ出会い頭の一言。

「は？」

何が？困惑する俺に顔を赤らめやがら追撃の台詞。

「薫くんの赤ちゃん」

「出来るかぁーっ！！」

いきなり何を言うんだ。このバカッ娘はっ！

「もう忘れたの？あの暑い夜を…」

「最初からない事は忘れようもないわっ！」

「そんなっヒドイっ！織姫とは遊びだったの！？」

「メヲサマセイモウトヨ」

「離婚なんかしないんだからーっ！」

「やかましぃわボケェーーっ！！」

兄妹じゃ結婚できんしお互い年齢満たしてないわっ。

「…もうっ洒落のわからない男はモテないよ？」

「モテないで結構です。」

「ちょっとした予行演習なのに」

プクッと可愛いらしく頬を膨らませる織姫。むう、そんなのは俺相手にしてはいけません。てか早過ぎだろ？

「近いうちに本当になるんだから、薫くんもきちんと心構えを…」

「必要ありません」

「…今が良いの？」

「話がつながっとらんやろっ！」

上目ずかいで俺を見るなよ。…可愛いじゃないかっ。チクショー！！

「はぁ。照れ屋さんなんだから」

「おい」

「痛くしないからおいで？」

「こら」

「たっぷり可愛いがってあ・げ・る♪」

「いい加減に目醒ませーーーっ！！」

「うふふ…ジュル」

ひぃっ！とんでらっしゃる！ヨダレ垂らしてるよっ！

「いいいいかんぞぉっ！」

「今日こそは逃がさないんだから…ハァハァ」

「いい息遣い荒いんですけど！？」

「薫タン、ハァハァ」

ギャーっ！どこぞの馬鹿みたいな台詞をっ！

「おお俺に興奮するなんておかしいぞっ」

「ハァハァ…ジュル」

キャーっ！！もう駄目だぁーっ！！

瘴気とヨダレを撒き散らせながら近寄る織姫。無理矢理大人の階段をのぼらされそうな雰囲気に、真剣にネバーランド辺りに一人暮しがしたいと考えながら、とりあえずお約束の如く叫んでみた。

「大人になんかなりたくないよーーっ！」

第２７話：子供の国。（後書き）

激短いですな。こんなんで良いんやろか？ハァ。それにしても織姫壊れすぎ（笑）

第２８話：人は変わるものです。

「呪いか？…これは？」

花音の部屋に足を踏み入れた途端俺は死にたくなった。

「何が？」

可愛いらしく首を傾げる我が幼なじみ。そんな彼女の部屋には…一面俺の写真だらけだった。

「えへへ♪薫に囲まれて幸せ☆」

横を向いても上を見ても下を見ても、俺・俺・俺。…恐いっ恐すぎるっ！こいつこんなキャラだったのか！？

「気に入った？」

そんな上目使いで言っても引いてしまいます。目眩がする。

「とりあえずベットにでも座って？」

「あ…ああ」

正直部屋から逃げたいのだが、衝撃のあまり頭がフラフラする為ベットに腰掛けるか。

「……っ！？」

なんだコレわっ。枕カバーからシーツから俺の顔がプリントされている。

「かか花音さん？」

「エヘッ♪」

「エヘッ♪じゃねぇーーーっ！！」

ヤバすぎるだろっ！？目を醒ませ！昔の君は何処へ行ったんだっ！？

「こんなのもあるんだ♪」

「おい」

奴が見せたのは1／1スケールの俺モデルな抱き枕。…めちゃくちゃリアルだ。

「凄いでしょ？衣服着脱可能なんだよっ？」

いきなり脱がし始める花音。…なんか襲われてる気分だ。

「ってオイっ！？」

リアルな為脱がした後はリアルな俺の…キャー！？

「隠し撮り写真から割り出したから、大きさはバッチリよっ」

「訴えるぞコノヤローーっ！！」

汚れてしまった。お婿さんに行けないよー。
「何なんだよっ！チクショー！大体なんかソレ汚れてるしっ」
「あっコレ私が付けた染み」
「キャーキャーキャーっ！！」
聞きたくないっ聞きたくないぞぉっ！
「皆キャラ濃いから、私も見習ってみたの」
「見習わんで良いわっボケェーーっ！！」
「眠れぬ夜は、この抱き枕で…げふんげふん」
「花音帰ってこーいっ！！」
「…でもいい加減本物の温もりが欲しいの」
「はいぃっ！？」
「抱いて」
「さようなら」
踵を返し逃げようとする俺。しかし逃げれるはずもなく…。あっさり捕縛。

「はーなーせーっ」

「乙姫さん直伝、秘技・薫極楽締めよっ☆」

「乙姫ーーっ！！」

「さぁ薫。抱き枕じゃ味わえない快楽地獄へ」

「キャーっ！！キャラ変わり過ぎだろーーっ！！」

舌なめずりしながら近寄る花音。今は亡き昔の花音に思いを馳せつつ、とりあえず泣きながら絶叫した。

「思い出を返しやがれっわーーんっ！！」

第２８話：人は変わるものです。（後書き）

花音壊し（笑）もうどっちかとゆーと月姫ですなコレわ。まぁ壊れキャラだからこその、らぶ・ぱら☆ですが。皆シリアスバージョンとはキャラ違い過ぎるなぁ（＾―＾；

第２９話：伝説の勇者様。その１

「待っていましたよ、勇者様！」

今は学校からの帰り道。乙姫ともに歩いていたら突然声をかけられた。女子大生のような感じの人だ。結構美人さんなのだが…痛い人種にはこれ以上関わりたくないので軽くスルーする。

「間に合ってます」

「ああっセールスではありません、勇者様！」

「ええいっ縋り付くなっ！」

涙目で俺に縋り付くその姿は、まるで悪代官と町娘。冗談じゃない、これ以上変人に好かれてたまるかっ。

「薫ちゃんってなんか変な人に好かれるフェロモン出してるの？」

首を傾げながら乙姫は楽しそうな目で俺を見る。

（てか、あんたもその変な一人だろっ）

口には出せない（恐いから）心の中でささやかなツッコミを入れてると

「何ですってぇっ！」

目を見開いて、怒鳴り付けて来た。

「ひぃぃっ！？」

忘れてたっ！俺の周りの奴は心の中どころかモノローグさえ読む奴ばかりだったんだ！

「変人なんかじゃないよね？」

「その通りですっサー！」

取りあえず軍人みたく直立不動で答える。…気のせいか口元に牙見えたんだもんっ。

「あのぉ」

「ん？」

声に振り返ると、なぜか顔を赤らめながらモジモジしているお姉さん。

「いきなり放置プレイなんて…大胆なんですね♪」

「なんでやねんっ！」

「なんかドキドキしちゃいました」

「ダァーッ！何でこんな奴ばかり寄ってくるんだぁっ！！」

一人クネクネと怪しいダンスを踊るお姉さんに、激しく頭を痛めながら絶叫する。

「薫ちゃん、変な人はほっといて早く帰りましょ？」
「あ、ああ。そうだな」
「お待ちください！」
「わっ！？抱き着くなよっ」
むうっ。抱き着かれ気持ち良い…もとい迷惑ではないか。
「ちょっとオバサン。薫ちゃんに何か様なの？」
「オバっ…！？私はまだ二十歳ですっ！？」
いつになく攻撃的な乙姫の口調と台詞にお姉さんも少し怒り気味だ。
「はぁ…。お姉さん何の用なんですか？」
「決まってます！勇者と言えば魔王退治しかありませんっ！」
グッと握りこぶしを掲げ力説するおねぃさん。…危険だ。危険すぎるぞっ。
「さぁ魔王退治に出掛けましょう！」
「いやちょっと待てっ！そんなんに関わる気はないっ！」
腕を掴み連れていこうとする彼女にキッパリと言い切ってやる。

…ちょっと男らしいな。
そんな俺の想いをよそに乙姫は今だ怒り気な雰囲気でお姉さんを見つめている。そしてお姉さんは
「そんなっ！？私の事を忘れたのですかっ！？」
ガーンと擬音が聞こえてきそうな程の表情で俺に訴えてくる。
「いや…忘れたも何も初対面だし」
「違いますっ！貴方と私は知り合いですっ！…前世で」
「おーい」
今なんか変な台詞が聞こえたが…。
「前世で貴方は勇者様。そして私は従者だったのです」
電波だ。このお姉さんは怪しげな電波を受信しているっ。出来れば受信だけで、こちらに発信はしないで欲しいんですけど。
「いえ、勇者様と従者と言うより、御主人様と奴隷。それはもう毎夜くんずほぐれつな関係だったのです」
「公道で馬鹿な事言うんじゃねぇーーっ！」
どこか得意げな顔の彼女に激しくツッコミを入れる俺。そんな俺に乙姫が今にも襲いかからんばかりの表情で問い掛ける。
「薫ちゃん？そんな事してたの？いけないなぁ？」

「ばかっ！冷静にに考えろ！明らかにおかしいだろっ！！」

「全て事実です。」

「何を言うっ！？」

「御主人様ったら激しいんですからっ♪」

「ふざけるなぁーーっ！！」

勇者からいつの間にか御主人様に変わった俺。頬を赤らめながら濡れた瞳で見つめてくるお姉さんを横目に乙姫は地獄少女の様に呟いくるのだった。

「いっぺん…死んでみる？」

第２９話：伝説の勇者様。その１（後書き）

久々？に続き物です。そういや最近シリアス編書いてないなぁ。これには関係ないんですが、ファンタジーの方でも新しく書き始めました。《夜空に架ける三日月に》と言うタイトルです。らぶ・ぱら☆とは、まったく違う文章の作りとなってます。よろしければ見てやってください。

第３０話：伝説の勇者様。その２

「ていっ！」

ガツンッ！

乙姫から立ち上る妖気を浴び、死を覚悟し目をつぶっていた俺に、聞こえて来た可愛いらしい声と鈍い音。

「〜〜っ！？」

何事かと目を開けると、頭を押さえうずくまる乙姫と、その後ろには電波系お姉さんの姿。

お姉さんの手にはどこから取り出したのか金属バットが。

（なな何て恐ろしい事をっ！？）

お姉さんのその行為に、これから始まるであろう惨劇に恐怖してしまう。

乙姫の頭の心配はしない。…だって乙姫だもん。

「大丈夫ですかっ！？勇者様！？」

「あ、あぁ…」

さすがにいきなりこんなのを見せられては、得意のツッコミもできない。

「悪は滅びましたっ！」

グッと拳をにぎりしめ高らかに宣言する彼女。

「いや悪って…。大体そのバットどこから？」

「女の子には秘密が付き物です」

「……」

黙り込む俺にお姉さんは、フムと頷くとこう言いやがりました。

「テレレテッテテ～ン♪金属バット～」

「やかましいわっ！！」

「ドラえもん嫌いですか？」

「ダァーッ！好きも嫌いもあるかぁっ！いきなり乙姫の頭はドツキやがって！」

おバカなお姉さんの行動にいつも通りのテンションが復活した俺に甘ったるい声がかかる。

「嬉しい。薫ちゃん心配してくれてるのね？」

…乙姫さん？あんた頭大丈夫なんですか？

いつの間にか立ち上がり、両手を胸で祈るように組み目を潤ませている。

「ふっ…さすがだな」

これ以外の台詞が思いつかんっ。常人なら即死のはずなのに…。

改めて御子柴一族の恐ろしさを噛み締めていると、乙姫がこちらに駆け寄ってくる。

「薫ちゃ～んっ！」

しかし

「そうはさせませんっ！」

またも立ち塞がるお姉さん。いきよいよくバットを振りかぶるが、バシッとそれを片手で受け止める乙姫。

すげえな…。普通無理っすよ。

「何するんですか？」

目を細め見遣る乙姫の姿にお姉さんが脳天気に答える。

「テレレテッテテ～ン♪金属バット～」

「それはもう良いっちゅーねんっ！」

律義だな俺って。一つ一つにキチンとツッコミ入れるし。

「何を考えてるか知りませんが覚悟は出来てますか？」

メキィっ！と言う音と共に金属バットが握り潰された。

（ひぃやぁっ！？）

恐いっ！恐すぎますっ！

お姉さんは平気な顔をしてるが、俺には無理っ！

ガタガタガタガタッ。

道の隅で膝を抱え涙目で震えるその時。

俺の耳に聞きたくない奴の声が、いや歌が聞こえて来た。

「デンデンデデンデンデデンデンデデンデっ♪」

俺の天敵であるそいつは、妙な動きをしながら歌い俺の前に立ち塞がったのだ。

そう今流行りのお笑い二人組みたいに。

「武勇伝♪武勇伝っ♪」

第３０話：伝説の勇者様。その２（後書き）

ぷろろ～ぐを除けばめでたく３０話！何処まで続くんでしょうな。
これからも頑張りますのでヨロシクです。

第３１話：伝説の勇者様。その３

「聞きたいか俺の武勇伝♪」

「聞きたくない」

奴――誠が馬鹿が加速される前に否定してやる。

「…むう。ノリが悪いぞ？」

ムシムシ。コイツに関わる暇わない。今はこの一帯の消滅の危機なんだから。　誠の後ろで繰り広げられている戦いを目に入れる。

「エクスカリバー！」

潰れた金属バットを振り回すお姉さん。

「ほう…聖剣に選ばれたのか」

「潰れた金属バットのどこが聖剣なんだよ」

今だ怪しい動きのまま言う誠に冷たく言ってやる。

「無駄無駄無駄無駄無だぁーーーっ！」

「ディオがいるっ」

往年の名台詞を言いながら避け攻める乙姫。その凄まじい攻撃に、耐え切れずっちに吹き飛んでくる。

「きゃあっ！」

こちらの様子に気付いてない二人。お姉さんは上手く体制を整えると、何やら取り出し攻撃した。

パンパンっ！！

……はっ！？あまりの事に呆然としてしまった。

「あんた何してんだっ！？」

「テレレテッテテ～ン♪拳銃～」

「あほかぁーーっ！！」

そう。お姉さんは道のど真ん中で銃をぶっ放しやがったのだっ！

「何がですか？」

俺の叫びが聞こえたのか、こちらに振り向いたお姉さんが、誠の顔を見て固まった。

「……、」

何だ？って、んな事はどーでも良いんだっ！乙姫わっ！？

「どこを見ているのです？」

乙姫は変わらずそこにいた。視線を外したお姉さんを睨みながら。

パラパラ……。

「こんな物では私はヤレませんよ？」

掌から零れ落ちる弾。

「…うそっ！？」

手で受け止めやがった！？ありえねぇ！？

「さすが１０００萌パワーの乙姫くんだな」

「んなわけあるかぁーー！！」

そんなパワーなんかないっ！！もう本格的に人をやめているじゃねーかっ！

（人外の生物だ）

「薫ちゃん、そこの雌犬と一緒に死ぬ？」

「ヒァヤっ！？ごめんなさいっ！」

０，０２秒で土下座。また心を読みやがった！

そんな俺と乙姫をよそに、お姉さんが誠を指差し叫びを上げた。

「こんな所で何をやっているのです！魔王よっ！」

「え？」

「勇者様っ！そやつが魔王です」

「えっ？えっ？」

事の成り行きについていけないんですが。誠が魔王？変態魔王ってとこですか？誠を見ると、まだ変なポーズのまま。しかし顔には不適な笑みが。

「よそ見をするなら、今すぐ死になさい！」

俺達をよそに乙姫がそう言うと、手に何かが握られていた。

（…縄だ）

俺のトラウマの一つになっているそれを、ブンブンと勢い良く振り回している。

「痛くはないですから。この世の物とは思えない快楽の中で死になさい」

ああ。どんな快楽とか聞きたくないよ…。気のせいか体がムズムズする。

そんな時に誠は、また歌い出した。

「聞きたいか俺の武勇伝♪」

「お前ってスゴイナ」

空気を読まない誠に、あるいみ感動すら覚える。
しかし奴の言葉の続きに俺は唖然とすることになる。お姉さんを指差し歌う。その内容に。

「目の前のコイツは、我が姉貴♪武勇伝♪武勇伝♪」

第３１話：伝説の勇者様。その３（後書き）

まだ続きます（笑）初の４話連続です。てか少しばかし御礼の言葉を。応援してくださる方々。有り難いメッセージを贈ってくださる方々。ありがとうございます！元気、勇気が百倍になりますです。小説を書き始めた当初は、こんなメッセージが頂けるなんて思いませんでした。これからもガンバリマスデス！

第３２話：伝説の勇者様。その４

「今なんと？」

誠が歌った内容に耳を疑う俺。

「姉だと言ったのだ」

「結局貴様がらみかぁーーっ！！」

「叫ぶな。ご近所に迷惑がかかるだろう」

「お前の存在が多大な迷惑をかけてんねんっ！！」

何なんだよもうっ。この馬鹿の姉かよっ。…なんか納得してしまうなぁ。

「勇者様っ！今すぐこの魔王をってきぁあっ！？」

お姉さんの呼び掛けを遮るかの様に体に縄がしばりつく。

「絶技。薫恥ずかし固め改」

「変なネーミングつけんな！ぼけーっ！」

「薫ちゃん捕縛用に編み出した４８手の一つなの」

「花音に教えてただろっ！？」

そのせいで以前貞操危機に見舞われたんだぞ！？

愚痴りながらお姉さんを見遣ると、そりゃーもう文章じゃ表現できんエロエロな…。俺にあれをしようとしたのか？

「ああ。なんか擦れます☆」

「ナニモイウジャネー」

ご近所の皆様方からの白い目線が痛いっすよ？

「…ようはお前達の兄弟喧嘩に巻き込まれたんだな？」

うっすらと殺意が芽生えちゃうぞ？コラ。

「この女が迷惑かけたな。」

「お前もな。大体何で俺を知ってる？」

俺はお姉さんを知らなかったのに。

「うむ。それは貴様の隠し撮り写真をコヤツに見せていたからだ」

「……今なんと？」

「貴様の恥部を見せていたのだよ」

「死にさらせぇーーっ！！」

渾身の一撃を見舞う。おーきりきり舞いだ。

「痛いじゃないか。」

知るかボケ。

「薫ちゃんの隠し撮り写真見せてたの？どんな？」

「トイレシーン・脱衣シーン・一人遊びシーンだ」

「あー欲しい！」

「では、一枚２０００円で」

「馬鹿言うんじゃねーーっ！！」

頼むから勘弁してくださいっ！一体俺が何をしたっ！？

「勇者様のその悶える姿…素敵です」

「黙れ変態！」

「言葉責めっ！？ならもっと過激に…」

「なんでやねんっ！！」

駄目だ…。二階堂姉オソルベシ。

「で。喧嘩の原因は？」

「はい…。私が精魂込めて制作した勇者様の１／１フィギアを花音さんとやらに売ったと言うので。薫様萌の敵！魔王ですっ！」

「あれを作ったんは貴様かぁーーっ！！」

めちゃくちゃ恥ずかしい思いをしたんだぞっ！！なんて奴だっ。大体薫萌って。やはり誠と同じ思考を。

「せっかく、前世みたいにご主人様プレイをしようとしたのに…。次は私が女王様で。萌萌です」

「もう何も言うなぁーーっ！！」

涙が出ちゃう。

「薫ちゃんの等身大フィギアっ！？花音ちゃんから強奪しなきゃっ！！」

「おい」

「じゃね？薫ちゃん！」

キーンとアラレちゃんばりのスピードで走り去る乙姫。……死にたくなりますな。

「…俺も帰る。てか帰らしてください」

「ご主人様っ！？次は無期限放置プレイっ！？」

ナニモキコエマセン。キキタクナイ。

胃に穴が開きそうなので、馬鹿姉弟を置き去りに足早に立ち去ろうとしたその時、俺に凄まじい衝撃が襲って来た。

「ぐっ……！？誠！？」

薄れ行く意識の中で、誠がなにか歌っているのが聞こえた。すげームカつく内容の。いつか殺してやる！

「意味はないけれどっムシャクシャしたからぁ～御子柴の頭を殴ってみた♪カッキーンっ！」

第３２話：伝説の勇者様。その４（後書き）

二階堂姉の名前はとくに考えてません。てか誠に姉がいたのかぁ…。知らなかった（笑）

第３３話：逃亡者・二階堂静香。

『銃刀法違反で逮捕された二階堂静香被告（二十歳）は何故か縄で縛られており、勇者様、ご主人様と意味不明な言葉を…』

「あうぅ……」

テレビから流れるニュースに脱力してしまう。

「ついに知り合いから犯罪者が…」

まぁ、いつかはこうなると思ってたけどな。ヤバイ奴らばかりだし。

「二階堂君のお姉さんって凄いのね」

「誠くんに似て変人さんなんだ」

一緒にテレビを見ていた月姫・織姫が好き勝手言う。…おまえらも同類ですよ？

「はぁ……。乙姫と花音は？」

「なんか決闘だっ！て言ったきり戻ってこないわよ？」

「なんの決闘だろーね？薫くん知ってる？」

「シリマセン」

言いたくないデス。

みんな一回逮捕されるべきだな。少しでいいから平和が欲しいし。夢のまた夢にすらならん妄想をしているとテレビでなにやらアナウンサーが叫んでいる。

『ただ今入った情報です。銃刀法違反で逮捕された二階堂静香被告が、勇者様に会いに行くと言い残し、刑務所内から逃亡。現在行方を追っているとのことです！！』

「ぶはっ！？」

思わず吹いてしまった！あのお姉さん脱獄かよっ！

「この家にきたりしてねー？」

「薫くんいるしぃ？」

「不安になる様な事は言わないでください」

有り得るから。勇者様って俺だし。

「平和が欲しい」

「えっ！？子供が欲しいっ！？」

「待ってて薫くんっ！今精力剤を１００本ほど用意するからっ！！」

「一言も言ってねぇーーっ！！大体精力剤１００本て！？」

「2週間くらい夜通しで」
「死んでしまうわっ。殺す気かっ！」
「そんなお兄ちゃん！？突き殺すなんてっ！？あっちなみに突き殺すの意味は…」
「やかましいわーっ！！」
ろくな事を言わん！何を考えてるんだよっ！？
「そしてお兄ちゃんも銃刀法違反で逮捕されるの」
「薫くん自身の銃刀でねー。きゃー♪」
「きゃー♪じゃねーっ！！何を言いやがりますですかっ！？」
あかんっ。もうコイツらも今すぐ刑務所に送るべきだ。
「お前らも刑務所にいきやがれっ！」
「そんなっ！？拉致監禁っ！？」
「そして飽きられたら東南アジアあたりに売られるんだ」
「その思考はどこから来るんだぁーーっ！！」
ハァハァ。つ、疲れる。毎日毎日これじゃ禿げてしまう。

もうどうにでもしてくれと、半分投げやりになった時、ガシャンっと窓が割れる音と共に、あの逃亡者の叫びが家中に響いた。…やはり来やがりましたか。

「勇ぅ〜者様ぁ〜〜っ！！」

第３３話：逃亡者・二階堂静香。（後書き）

出す気なかったのに、思いつきで二階堂姉続編です。名前も付けちゃった。

第３４話：共犯者・御子柴薫。

「勇者様っ！お逢いしとうございましたっ！」

そう言うと目の前に立つお姉さん。ガラス窓を割って入ったせいか、頭からドクドク血が流れている。

「……窓弁償、土足厳禁」

「そんなっ。やっと会えたのに冷たいお言葉」

取りあえず怪我の事は無視して言う俺に、ヨヨヨと泣きまねをしやがります。

「貴方が二階堂くんのお姉さん？」

「全然似てないね？」

そう感想を漏らす我が妹達。てか、ツッコム所はそこではないぞ？不法侵入者だぞ？

内心でささやかなツッコミを入れていると、お姉さんはいきなり爆弾投下な言葉を吐きやがりました。

「貴女達が、勇者様に近付く牝豚どもね？」

「ななな何て事をっ！？」

馬鹿かコイツわっ！？…いや確認するまでもなく馬鹿だったんだ。

「なんですって？」

「年増が何か言ってるね？」

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ。

キャーっ！？家が揺れてるっ！？マグニチュード８だぁっ！。

「サカリのついた牝豚と言ったのです。ぺっ」

唾をはくまねをしながらお姉さんは言う。もう死んだな…多分俺が。今までのオチからして最後は俺にくるし。

「ババァ…」

「棺桶に更に近づきたいの？」

「発情気の牝は大人しくそこらの犬と戯れてなさいな？」

睨み合い罵り合う彼女達。それと同時にドーンと床が抜ける音がした。

（家が潰れる…家なき子になってしまう）

あまりの恐怖にどうでも良い事を思ってしまう俺。　しかし、ここは長男として何とかしなければならん。

「おおお落ち着け」

…俺が落ち着かなあかんやん。

「ちょっとお姉さんっ」
「犬と呼んでください。ご主人様」
「……」
「豚でも可ですっ！」
ビッと親指をたてナイススマイル。いやなんかもう…死にたいなあ。
「…じゃあ静香さん」
「…ちっ」
なんだよ、ちって。
「呼び捨てで構いません。薫様」
「あーもうどうでもいいや。なんでここにいる？」
チラッと妹達を見ながら聞く。おー顔が阿修羅だ。
「正妻の座をつかむためです」
「帰ってください」
「そんなご無体なっ！？」

そんな泣きまねしても無理です。今まで散々騙されてきたからな。

「振られたんだから帰りなさいよ」

「年寄りはピップエレキバンとでも戯れてたら？」

あおるなよ…。静香さんが暴走するだろーが。

「ふっ。可哀相に薫様。この牝豚達に脅されてますのね？」

「ある意味そうだな」

「「なんですってぇっ！？」」

ひいぁっ！？しまったぁっ！？つい本音がポロリとっ！！

焦るその時、ヒュンッと何かが俺の頬をかすめ、さわると血が。

「なんじゃコリャーっ！？」

思わず往年の名台詞を叫ぶ俺。見やると月姫が拳をこちらに向けたままのポーズ。拳からは摩擦熱からでた煙が。

（マッハパンチだっ！？）

あまりの速さに拳から衝撃波を出しやがったっ！！

「その年増と共に、お兄ちゃんにも教育が必要みたいね？」

「教育って言うか躾？むしろ調教かな薫くん？」

「すんませんでしたぁーーっ！！」

叫びと共に土下座。頭を床に何度も打ち付け誤り倒す俺。今なら世界土下座選手権一位になれるぞっ。

「薫様…。大丈夫です。私がこの小娘達を成敗致しますから」

「お願いですから喧嘩売らないでください」

涙を流しながらお願いする俺。…プライドのかけらもありません。

「「望む所よっ！！」」

あーダメだぁーっ！今日こそマジで死んだぁーっ！！

先立つ不幸を絶望感いっぱいの俺は、もはやこれまでと離れて暮らす両親に、心の中で詫びていると、やはりと言うかなんと言うか…。奴の声が聞こえて来た。まさにお約束。

「あーテステスッ。犯人につぐ。君達は完全に包囲されている」

第３４話：共犯者・御子柴薫。（後書き）

お姉さん最高！まさかここまで使いやすいとわっ。二階堂姉弟は使いやすくて助かります。

第３５話：追跡者・二階堂誠。

「君達は完全に包囲されている。可及的速やかに投降しなさい」

拡声器から聞こえる誠の声。窓の外をみると、誠と警官隊が家を包囲していた。

「んなアホな」

「主犯者御子柴薫には、婦女暴行監禁及び銃刀法違反の罪で刑罰が降されるのだっ」

「ちょっと待てえぇーーっ！」

何だその罪状わっ！？てか主犯者てっ！？

「証拠は上がっているのだよ。月姫くん達を解放したまえ！」

「ここは我が家じゃあーーっ！！大体なんでお前が警官隊を引き連れてんだよっ！？」

「我輩の父は警視庁総監だ。これくらいの職権乱用は朝前なのだよ」

「日本の警察は終わりだあぁーーっ！！」

嫌な真実を見せ付けられ嘆く俺。それを見た月姫達が

「これからって時に邪魔して…潰してしまおうかしら？」

「もうとってもフラストレーション。薫くんやるよ？」
「ふふ。恐怖のデフレスパイラルを味わいなさい」
「馬鹿言うんじゃねえーーっ！！」
これ以上ヤバクするなよっ！！
「どうやら人質は洗脳されているようだな。しかたない抹殺命令を」
「何ほざくんじゃ誠っ！？」
「誠違うアル」
「だまれっ」
「大人しく死ぬヨロシ。日頃の恨みネ」
「それが理由かぁーーっ！！」
怪しい中国人みたいな話し方しやがってっ！
「ねえ？まだ殺しちゃダメ？」
オアズケをくらった様にソワソワしている月姫。
（やばい。ジェノサイドモードに入ってらっしゃるよっ）

見れば三人共に目が爛々と光り中毒者みたいな感じだ。

「御子柴よ我輩はカナシイゾ？欲望に溺れ萌えガールを監禁とは」

「ようはお前の憂さ晴らしじゃねぇかっ！」

「……気のせいだ。萌えにモテるのが決して羨ましいからではない」

なんで間があく？しかも白状してるやんけっ。

「ちなみに今テレビ中継されているから」

「なんだとーーっ！？」

よくみるとテレビ中継車がありやがるっ。

「やだっ！？全国デビュー！？お兄ちゃんとの結婚式を今すぐ全国ネットでっ」

「ファンがこれ以上増えたら織姫こまるわ。あっでも薫くん命だから」

「全国の青少年が私を欲望の眼差しでっ！いけませんっ私にはご主人様がっ！」

「少しは危機を感じてくれぇーーっ！！」

ぜいぜい。あかん息ぎれが。

「全国の皆さーんっ！こいつは近親相姦魔ですよーっ！！」

「ぎぁやぁーーっ！！何て事言うんだぁーー！？」

「兄・弟と言う立場を利用して夜な夜なネコミミ・ウサミミを付けての悪行三昧なのですよー」

「きゃーーっやめてーーっ！！」

終わった…。人生が。周りの人達が

「えっマジ！？」

「最低ー」とか言ってるのが聞こえるよ。

「観念するアル。嘘をついても、こちらにはまだ奥の手もあるアルよ」

これ以上なにがあるんだよ？疲れ果てた俺が誠を見ると、二人の少女が立ち並んでいた。何故か俺そっくりの等身大フィギュアを抱いて。

「「大人しく投降してっ！！私たちの為にっ」」

第３５話：追跡者・二階堂誠。（後書き）

えーと。二階堂誠の名前がぷろろ～ぐで二ノ宮になっているとのご指摘がありました。すいませんｍ（．＿．）ｍ気にしたら負けです（笑）

第３６話：破壊者・悪魔超人ズ。

「薫ちゃんは、その牝犬に騙されているのっ！正気に戻ってっ！
そして更正してっ」

「薫っ！！大人しく罪を償うのよっ！貴方が今まで私にしてきた、
あ～んな事やこ～んな事をっ！！」

裏切りだ。あっさりと寝返りやがったよ。

「何してんねんっ！？」

「「誠くんにフィギュアやるから手伝えと」」

「んなもんで餌付けされんじゃねぇーーっ！！」

乙姫・花音よ。君達は馬鹿か！？

「本物が捕まったら意味ないじゃない」

月姫の言葉に二人は

「「あっ……」」

おいおい。チミタチ…。

「むう。見破られたか」

相変わらずコイツらって頭の捩がゆるんではるよなぁ。

「ふっ私を騙そうなんて百年早いわっ」
「私は薫ちゃんを信じていたわよ」
と変わり身の早いオバカサン。
「とにかくどうしたいのか決めてほしいんだけど？」
「決まっていますっ！殲滅するのみっ！！」
「国家権力を敵にまわすなぁーーっ！」
織姫と静香に叫んでみるが、勿論通じるはずもなく。それどころか誠が
「仕方あるまい。ただいまより御子柴一派掃討作戦に移る」
などとほざくしまつ。
「お前は国家権力を玩具にするんじゃねーーっ！！」
もはや無駄とは悟りつつも言う。男には無理だとわかっていても言わなければならない事があるんだよ。…くすん。
「突撃ーーっ！！」
あまりの不条理さに、嘆いていると誠の命令とともに数十もの警官隊が迫り

「かかってこいやぁっ」

「ミナゴロシミナゴロシ」

などと危ない片言で喜び勇んで立ち向かう姉妹＋一人。そんな姿を見て

「発砲許可をするっ撃てーーっ！」

「きゃー人殺しっ！やめろっ」

「撃ってみたかったのだ」

「あほかぁーーっ」

んな事笑顔で言うなよっ！！死んでしまうっ。

恐怖にかられ彼女達をみると

「ウヒャホホー」

「ミナゴロシミナゴロシ」

「無駄無駄無駄無駄ーっ！」

「血が血が一杯っ。ゾクゾクしますわっ」

「玉ぁとっちゃるっ」

などと危険な言葉を吐きながら平気な顔、いや危ない顔付きで敵

を殲滅していっていた。

（んな馬鹿なぁ）

半笑いになりながら見ている俺。あっ、今銃弾跳ね返した。あっ、ロケットランチャーがぶっ放されたぁ。あはは。…はっイカンっ！？軽く壊れてしまっていた。

「やめてくれーーっ！！」

我に返った俺は無謀にも叫びながら突撃して止めようしたが、それがいけなかった。

ガシッ

「あっ…」

頭が殴られる衝撃と月姫の呟きの中、俺は崩れ落ちていった。

（魔女…いや悪魔達の宴だ）

ピクピクと痙攣しながら破壊されていく町並みを見遣る俺。

もうアカンやんっガクッ。

諦め一人死んだふりする事に決めた。うん、だってマジ死んじゃうもんっ。

狂った様に奇声を上げてもはや関係なく町を破壊していく悪魔超人達。それを中継するテレビ。巻き込まれる哀れな人達を見ながら

俺はそれでも死んだふり。そんな俺を

「楽しそうだな？」

と、いつの間にか横に非難していた誠が棒でつついてきやがった。

「おい」

「しかし、何をあんなに破壊しているんだろうな？」

「お前のせいじゃーーっ！！」

暢気な誠に、ガバッと起き上がり改心のツッコミ。

「「「「「コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」」」」」

その叫びにキュピーンと目を光らせ怪しげな呪文と共にこちらにくる悪魔超人。

きゃーーっ！！もはや無差別だぁっ！

ガタガタガタガタガタ

震えながら誠をみると、奴はさっきまでの俺のまねをし、死んだふり。その目は哀れみを浮かべている。

「てめっ！？きたねって、ウギャアァーーっ！！」

最後まで言う事なく彼女達の地獄おとし。

HitHitHitHitHitHitHitHitHitHitHi
tHitHitHit・・・

（見事だっ百烈コンボっ！！）

地獄のコンボが炸裂し錐揉みしながら残る力で叫んでやった。死なないために。

「地球のみんなっオラに元気を分けてくれえぇーーっ！！」

第３６話：破壊者・悪魔超人ズ。（後書き）

えーいつも以上に話しの流れと展開がめちゃくちゃです。あまりにも眠くて・・て言い訳でもしてみます（笑）てか、評価方式が変わったせいで評価コメントが消えたのがかなりショックな一日でした。

第37話：独白。後少しはこのままで・・・

「…暑いな」

休日である日曜日。俺は何をすることもなくブラブラと町を歩いている。

季節はもうじき夏へと移り変わろうとしていて、町の雰囲気もどこかしら明るい。

「そう言や、皆で海に行こうって言われてたっけな？」

ふと目に留まった旅行会社を見ながら呟く。

（海だけじゃなく…花火も祭も）

楽しそうに、嬉しそうにハシャギながら話していた姉妹・幼なじみ達の姿を思い出しながら、空を仰ぎ見る。

「昔じゃ考えられないくらい騒がしくなったなぁ」

楽しいけどと口の中だけで続ける。

俺の周りには魅力的な女の子達がたくさんいる。野郎達は羨ましがるけど、それなりに俺にだって苦労はある。

「皆…縁深いんだよな」

ガキの頃以来に再会した、月姫・乙姫。馬鹿なガキだった俺は何も考えずに彼女達と将来を約束し、また彼女達はそれを信じている。

今時そんな子いないのに。

実妹の織姫は、何時まで経っても兄離れできず、それどころか求愛してくる。俺もそれをマジには断っていない。大切な妹だから。

そして…会えないと思っていた花音。一番俺に近い幼なじみ。こっちに来てからは昔じゃ考えられないようなアプローチをしかけてくる。もし、引っ越す前にあんな感じだったなら…多分今頃は恋人だっただろう。

まだ他にもいるが…。とにかく彼女達の存在は俺の中ではデカイ。

ダラダラ続くお遊びのような関係。何も言わない彼女達に甘え、俺は現実から逃げている。

「いつまでも続くはずなんかないのにな」

皮肉気な笑みを浮かべながら思う。

いつかは終わりを迎える関係。誰かと結ばれた時夢は覚めるんだろう。甘い夢は。

周りの生徒たちに優柔不断・遊び人など陰口を叩かれている事は知っている。　だが反論する気はかけらもない。

（気持ちを知っていながら、何もせず日々を暮らしているのは事実だからな）

彼女達を真剣に好きな男達にとっては、俺は最悪な人間だろう。また彼女達の女友達にとって次に、前に進めないと非難する対象者

だ。

「わかっているんだよ。わかっているんだけど」

恐いんだよ。心の中だけで最後は言う言葉。今を、今の心地良い環境を失いたくない。全ては俺の我が儘だとしても。

「…なんか、柄にもなく考えちまったな」

町中には、夏に期待して浮かれ気分のカップル達が多く目立つ。そのせいで、考え込んでしまったみたいだ。

はあ。と軽く溜息を吐くと前にいる存在に気付く。　いつの間にか、家はもう目の前。そして家の前には、俺を悩ます我が儘な女神達が微笑み手を振っている。

自然と頬が緩み、笑みが零れてしまう。

いつかは出さなければならない答。それはもしかしたら決別、悲しい別れと続くかもしれない。だから今は…我が儘かも知れないが溺れていたい。このはかなげな夢の海に。少しくらいは、後少しは許されるよな？

誰にも聞かれる事なき独白をしながら、俺は彼女達に向かって駆け出し、満面の笑みと共に言う。今ここにある幸せを噛み締めながら。

「ただいま」

第３７話：独白。後少しはこのままで・・・（後書き）

かなり久しぶりなシリアス編です。普通に考えたら薫は周りからみたら最低に思われるんでしょう。自分自身も経験があります。恐くて逃げて、周りを傷付けるとしても甘えてしまう世界。好きになる理由・臆病になる理由は人それぞれですが、素直になるだけでは幸せになれない事もあります。人を好きになるのは簡単に見えて、とても大変な難しい事ですね。

第３８話：少女達の恋。その１

「好きですっ！付き合ってくださいっ！！」

「ごめんなさいっ」

告白の言葉に間髪入れず私は答えた。目の前の男の子は傷付いた表情を浮かべ下を向いている。

「…ごめんなさい」

私はもう一度彼に言うと、背を向けここから――屋上から足速に歩きさった。

「…はあ」

屋上から教室へと向かう途中の階段。降りながら知らず知らずと溜息が漏れる。

あんな傷付いた顔されても困る。断る方だって傷付く事はあるんだから。

はあっともう一度溜息をつくと横から声がかかった。

「花音ちゃん」

ちらっと視線を向けた先には、私が転校して来てから仲良くしている女の子で…まあライバルの一人でもある星野由香がニコニコしながら、私を見つめている。

「なによ…」

少し憮然として答える私に気を悪くするふうでもなく、私と歩みを共にする。

「付き合うの？」

「本気で言ってるそれ？」

彼女の問い掛けに、半眼になりながら尋ねかえし、どうせ聞いてたんでしょと口の中だけで言葉にする。

「モテモテだよね？花音ちゃんは綺麗だから」

「…由香に言われたくないわよ」

目の前の美少女に言われてもあまり嬉しくはない。

「でも転校して来てからもう１０回以上告られてるでしょ？」

「…１３回よ」

その言葉に、凄いねと目をパチクリとさせている。その仕草一つ一つが可愛いらしく由香が人気があるのも頷ける。

「転校して来てからまだ１ヵ月くらいなのに、凄い数字だね」

「迷惑よ」

称賛ともとれる言葉を、私は切って捨てる。その言葉に言い過ぎよと嗜めの視線が向けられるのがわかるけど、私は訂正する気はな

い。

「私は、今流行りの何となく付き合うとか、ただカッコイイ・可愛いとかの理由は大嫌いなのよ」

「薫くんもいるしね？」

薫。その名前を聞いただけで私は頬が熱くなってしまう。ごまかすかのように、少し声をあらげ

「たった1ヵ月で私の何が好きになるのよっ。顔だと言うなら殴ってやるわっ！」

「花音ちゃん恐〜い」

おどける由香だけど、まぁわかるけどねと、私に言う。彼女だって告白の数は半端ではないのだから。

私は自分が美少女だと自覚している。だから何なのよってよく思うけど、カワイコぶりっ子する気はない。事実は事実として受け止めている。…自分から口に出す事はないけど、言われれば素直に答える事にしている。その方が嫌味にならないから。

「でも中には、きちんとした理由がある人もいるでしょ？」

肩にかかる髪を指で遊ぶ彼女に、傷むわよと注意しながらその言葉に対しての返答をする。

「…中にはね。でもやっぱり曖昧だし、それにどの道付き合う気なんかないから」

それは由香も同じでしょう？続ける私に、頷く彼女。

「一目ぼれを否定する気はないし、外見を疎かにする気もないけど」

「私には無理ですってかな？」

言葉を奪う由香に、私は軽く頷く。

外見を否定する気はない。外見なんか気にしないなんて言葉は嘘だから。第一印象は外見以外にはありえない。始めから内面がわかれば、それはエスパーだ。それに…外見を気にしないって言葉は、やっぱり気にしない事を気にしている証拠だから。お化けみたいな顔をしている人と付き合える人なんかはいない。

そこまで考えて、私は言葉を続けていく。

「私の恋愛は…そんなものじゃないから。確かに彼の顔は好きだけど」

「１０年以上熟成させてる恋だもんねー？」

「そんなワインみたいに…」

お気楽チックな台詞に苦笑しながら、歩みを止め軽くデコピン。痛いと可愛いらし唇を尖らせて抗議する彼女を無視し、先に進む。

「確かに、花音ちゃんみたいな恋愛してる人から見れば、嫌かもね」

急ぎ足で追い付く由香を見ずに、私は言う。

「彼らの…まあ彼女達も当て嵌まるけど、そう言う恋愛感を否定する気はないわ。ただ私には無理なだけ。ろくに話もしない私に、しかもたった一ヵ月程度の時間で告白する勇気は凄いけどね」

「好きになるのに時間は関係ない。付き合ってくださいからの言葉からお互いを知ればいい。…前に私が言われた台詞だけど」

てへっと舌を出し言う由香に視線を向け

「それも否定しないわ。でもやっぱり無理」

10年以上彼を見続け、また会えなかった3年間も彼を思い続けたのだから。

嘘をつくときの癖・苦手な食べ物・得意な科目から言えばきりがないけど、私は殆ど知っている。自分自信の人生と同じ年月を常に隣にいた彼を心から追い出す事なんか、私に出来ない。そんな事は死と同じだ。

「まあ…わかるんだけど、でも理解してくれる人は少ないよ？私も月姫ちゃん達も、かなり反感かってるから」

「…わかってるわ」

取っ替えひっかえ男を換えてるわけではないから、女子からの反感はあまりない。まれにしてもないのに彼氏が寝とられたと騒ぐ子もいるけど、男子はそうはいかない。逆恨みが最近かなり多く、矛先が薫に向く事も多い。

「薫くんも大変ねぇ」

「…あんたも原因の一人でしょーが」

「えへへっ」

「ったく…教室ついたわよ。この話しはおしまい」

目的地についたと同時に、授業の開始を知らせるチャイム。それに被さるように、はーいと返事する由香と共に私は教室へと足を踏み入れた。

第３９話：少女達の恋。その２

授業を受けながら先程のやりとりを思い出す。
恋愛について・・・

好きになる事事態は悪ではない。相手に恋人がいようが、結婚してようが、…同性だとしても。
ただそれを受け入れるか、また相手への伝え方や想い方で全ては変わってくる。

「私の場合は何しても無駄だけどね…」

私の呟きが聞こえたのか、隣に座る月姫が怪訝な表情を浮かべ、また月姫の前に座る由香はニヤニヤと笑みを浮かべている。

（声大きかったかしら？）

顔が赤くなるのがわかってしまい、ふうっと息を吐き体内の熱を追い出してみる。

（薫はどう思っているんだろ？）

相も変わらず逃げ回る彼を思う。まあ、今の状況で逃げる気持ちはわかるんだけど。…私達も楽しんでるし。

（でもいつまでもこのままじゃ…ね）

愛されてる自信はある。けど確信は持てない。煮え切れない気持ちを抱えて、悶々とする時だってある。　転校してすぐに付き合え

るとは思っていなかった。もう相手がいるかも知れなかったし、何より気持ちを伝えるのが先だったから。…まさかこんなにライバルがいるとは思わなかったけど。
しかも皆揃いも揃って美少女ときている。事実を知った時、気が遠くなってしまったくらいだし。

（楽しい生活環境ではあるけどね）

退屈な授業を聞き流しながら、意味もなく教科書をめくり思う。

（ほんっと薫ってば、モテ過ぎっ！！漫画みたいな生活しちゃってっ！！）

ちらっと左斜め後ろに座る薫を睨め付けると、目があった。何故か顔を真っ青にして震えている。…失礼ねっ！！

もう一度睨み付けて、視線を前に戻し、これからの事を考え込む。

（って言っても…。どうしたものやら）

何とか進展させなきゃいけないんだけど、どうすれば良いのかまったく…。

（あせっても仕方ないか…それより）

さっき告って来た子が、陰険な子じゃない事を祈らなきゃ。因縁付けられるのは馴れてるけど、欝陶しいのには違いないし、何より薫に矛先が向くのは絶対に許せない。もし薫に何かしたら沈めてやるんだからっ！！

そこまで思った私は、ふと思ってしまった。

…名前何だっけ？

第３９話：少女達の恋。その２（後書き）

暫くシリアスが続きます。いつまでもギャグじゃ進まないし、一応恋愛小説らしいですから（笑）シリアス時は文構成がどうしても変わってしまいます。まあギャグ時みたいに、めちゃめちゃな文構成じゃないから良いかな（＾―＾）

第４０話：少女達の恋。その３

私は星野由香。誰に言ってるんだって？それは秘密です☆
花音ちゃんは、最近お疲れ気味の様です。まぁこんな短期間で、１３回も告白受けてたら疲れると思うけど。

ほんとに彼女はモテます。というか、薫君の周りにいる女の子は皆綺麗でモテモテなのです。

（私もその一人だけど。てへ）

な～んて可愛いらしく舌を出してみました。もちろん心の中だけですよ？

あっいけないっ！？授業に集中しなきゃっ。…でも気になるんですよね。なんてったって女子高生の感心事Ｎｏ．１は、やっぱり恋愛ですから♪

もちろん私自身の恋愛もです。うふふっ私の好きな人は花音ちゃん達と同じ、薫君。とってもカッコよくて、でもどこか情けない。そんな人。わかんないかな？とにかく優しい人なの。

作りものの優しさとは違う、自然の優しさ。普段当たり前にしている行為が、あまりにも自然で…。打算のないその行為に、ついクラッと来てしまうの。

（本人は自覚症状ゼロみたいだけど…）

彼の様に自然に優しさを出せる人は、凄い魅力的だと思う。

ただ…。それがあまりにも当たり前にしている薫君は、その行為が誤解を生んでしまう事がある事を気付いていないの。もちろん彼の良い所なんだけど、勘違いしてしまう女の子にとっては、とても残酷で。

（まあ、治す必要はないと思うんだけど）

私も勘違いした一人。でも私の場合は勘違いだと認識してます。彼の事が好き。付き合いたいと思うけど…。このままで良いとも思うの。

元々ラブレターを渡した時に、付き合ってくださいとは言ってないし。

それに今の環境が、とても心地良いの。逃げてるんだって自覚はあるけど、私はこのままで良いと思う。

（今だけはね？）

だって、いつ我慢できなくなるかわからないし。私だって欲望はあります。その…薫君としたいとか思ったりってキャーッ！！何言ってるんだろ私っ！？

少し興奮しちゃいましたっ。えへへっ。んっ？なんか今花音ちゃんがブツブツ言ってます。振り返って見てみると顔が赤いです。

どうやら薫君の事でも考えてるみたい。花音ちゃんと目があったけど、私はニヤニヤと顔が笑ってしまうのが止められなくて。あははっ今度は薫君を睨んでる。

（あっ…。薫君顔が真っ青で震えている）

よっぽど凄い形相でにらまれたのかな？冷や汗がダラダラと出てます。

（女の子には、とことん弱いね？）

そんな薫君を見て、私は言ってしまいます。もちろん心の中だけでですよ？花音ちゃんみたいに、口には出しません。

優しくて、女の子に弱くて。

そして鈍感さんな薫君。

私はこの学校の入学試験の時から彼が好きだった。　私はドジだから、校舎で迷子になって、たまたまいた彼に連れていってもらったんです。しかも最悪なことに受験票を家に忘れたみたいで…。泣きそうになった私を見兼ねて、代わりに試験官の人に掛け合ってくれたんです。彼のお蔭様で何とか受験できる事になって。そしたら試験時に席が隣で。

（安っぽいかも知れないけど…私は運命と思ってしまったの）

それからは、彼を毎日目で追い掛ける日々。同じクラスになれた時は、夢みたいな気持ちで、軽く昇天しちゃいました。

最初はラブレターも渡す気はなかったの。だって薫君の周りには、可愛い女の子が何人もいて。

でも我慢できなくて。せめてあの輪の中に入りたくて…とても暖かそうな、あの輪の中に。

（ラブレターを渡した時、ビックリしてたっけ？）

あれからすぐ、ドタバタがあって。でも凄く楽しかった。

きっと薫君は入学試験の事は覚えてないと思います。彼はそんな人だから。でも、そんな薫君が私は大好きなんですっ！！

惚気ちゃいました？エヘッ。

いつまで続くかわからないけど、とにかく今はまだ…皆で仲良く楽しくいたいな。

もちろん最後の最後は…私を。ね？

第４０話：少女達の恋。その３（後書き）

めでたく４０話！！作者もビックリです。祝とかそうわけではないんですが、今回は由香が初主役。一人称独白と言う形にしました。ほんとはもっと早く彼女を使う予定だったんですが、話しの流れ上今回になりました。一応ヒロインの一人な彼女。大変影が薄いですけど、めげずに頑張って！！

第４１話：少女達の恋。その４

どうもさっきの休憩時間から花音の様子がおかしいわ。どっかのクラスの男の子と屋上行くの見掛けたから、また告白でもされたんだろうけど。

（何を今更悩む必要があるのかしらね？）

周りが何を言おうが、自分をしっかりと持っているのなら悩む必要はないわ。……間違ってたり、迷惑かけてたりなら別だけど。

（私は何も間違ってなんかないって胸をはれるわ）

ノートに授業の内容を写しながらも、私は意識半分で考える。

（お兄ちゃんも罪作りよね……）

……もっともそれでこそ私のお兄ちゃんなんだけどね。

そこまで思い、ちらっとお兄ちゃんを見たら、なんと花音に睨まれてるじゃないのっ！……ああっかわいそうに。あんなに顔真っ青にして……。

（後で私が慰めてあげるからっ！！）

あ～んな事やこ～んな事までしてねっ！

（あんっいけないわお兄ちゃんっ！？そこはっ！？）

ジュル――

はっヨダレヨダレっ！？いけないわ。つい妄想の世界に……。それにしても妄想世界のお兄ちゃんたら大胆なんだからぁ♪

「うふふふふふふ……お兄ちゃん…ジュル」

あっ声に出しちゃった。まさか聞こえたかしら？恐くて流石に確かめられないわ。

なんか最近段々私が壊れていってる気がするけど……。仕方ないわよね？奥手なお兄ちゃん相手じゃ。

（私がもっともっとアプローチかけて、虜にしなきゃっ）

その為に毎日オシャレに気を使ってるし、誘惑だって手を抜かないわ。

（でも最近やりすぎかなとも思うのよね）

たまには引いてみようかしら？そしたら…焦るかな？

ほかの男に靡くふりしたりとか……。ありえないわね。考えただけで鳥肌立つわ。私の心にはお兄ちゃんしかいない。誰も入る余地なんかないの。だから恋愛の事で、周りに惑わされる事なんか絶対にないわ。今までもこれから先もずっとずっと……。

（貴方だけを愛しているんだから……ね）

第４１話：少女達の恋。その４（後書き）

いつにも増して短いお話。まさに、ショートショートですな。てか、どうもシリアスになりきれず、シリアス風味なコミカルになりました。まぁこの方が、らぶ・ぱら☆らしかな？

第４２話：少女達の恋。その５

今は授業中――なんだけど。どうも花音の様子がおかしい。一人でブツブツ言ったり顔を赤らめたり。

（一体なんなんだ？）

どうも気になる。別に花音が気になるとかじゃないんだぜ？ただ……そうっ心配なだけだっ。

てか、最近野郎どもの風あたりが、かなりキツイ。

単なるヒガミ、八つ当たりな事に気付いてるんかね？自分が振り向いてもらえないからって、俺にあたるのはおかしいだろ？ストーカーみたいな神経しやがってさ。

はぁ――溜息出ちまう……んっ？なんか視線が――

（うひゃあぁっっ！？）

危うく口から悲鳴が零れるところだった。…何故に睨むのですかっ！？花音さんっ！？

（恐い…恐いよーっ！）

あうう…。冷や汗が止まらん。なんか知らんが、かなりご立腹なご様子。

不条理だ。なんか俺の代名詞とかしているなぁ。

半泣きになりながら、花音から視線を外すと、次は月姫の声がきこえ、寒気が。

（…何考えてんねんっ！？）

ああっ！？ヨダレ垂らしてるぞっ。背筋がゾクゾクする。鳥肌が立ってるやんっ。

まさかと思うけど…やっぱ俺で変な妄想をっ！？こいつらは授業中でもおかまいなしかよ。

（うう。普通にしてたら可愛いのに）

そんな嘆きとともに、とりあえず休憩時間になったら、ダッシュで逃げる事にする。

（絶対被害くいそうだもん……）

俺はコイツらに惚れてる奴らに声を大にして言ってやりたい。

お前達皆、騙されてるぞっ。目を醒ませと。

無理だろうなぁ……。

むっ！？授業終了のチャイムだ。ではこれより作戦を決行する。

（これは逃亡ではないっ。戦略的撤退なのだよ軍曹っ！！）

心の中で非難する、軍曹に言い聞かせ俺は椅子から立ち上がり――

ビッタァーーン！

はわっこけてしまったっ！！

（作戦失敗。速やかに投降する）

すでに俺に向けて近付いてきている敵兵を確認し諦める事にし、取り敢えず最後の悪あがきを。

「こ、国連に連絡をっ！」

第４３話：少女達の恋。その６

「ふざけないでっ！！」

私は今猛烈に怒ってる。原因は目の前の彼。

「何がだよ？織姫？」

「あんたに呼び捨てにされる覚えはないんだからっ。セクハラよっ」

同じクラスの男の子。彼が薫くんを馬鹿にしたの。

「呼び捨てにして良いのは、愛しいオニイサマだけかよ……」

どこか拗ねた感じで言う彼。だけどそんなの知った事じゃない。

「大体何が、薫くんだよ？馬鹿じゃねぇの？」

「……ッ！？」

また言ったっ！許せないっ！

「兄弟でさ。お前の兄貴変態じゃねぇ……」

パンッ！！

響き渡る破裂音。彼が最後まで言う前に、織姫はひっぱたいてやった。だって許せないもん。

「なっ何しやがるっ！？」

彼も周りも唖然としている中、彼に向けて

「あんた馬鹿？」

「……ッ！？」

あっ顔が引き攣ってる。

「…あんたこの間、織姫にフラれたのが気に食わないんでしょ？」

「……」

やっぱり図星みたいね。

「で？織姫の大切な人をけなして……あんたに惚れるとでも？」

馬鹿じゃない？そう続け思う。まるで子供の癇癪。好きな人を馬鹿にされて許されるわけないのに。

「でもっ！兄弟だろっ？」

「だから？」

彼の切り返しに即答で返すと

「好きになるのにそれが関係あるの？」

「関係あるだろっ」

ただ叫ぶだけの彼。分からず屋ね。はあ――軽く溜息をつくと

「ないわ。悪い事じゃないもん」

話しを続けていく。ホントは顔も見たくないんだけど、いい機会だし周りの子達に聞こえるように、声を大きくし話すことにする。

「織姫は別に悪い事してないもん。ただ好きなだけ…。人を好きになることがいけない事？」

「……でもっ」

「でもじゃない。兄弟だからなんなの？別にあなたに文句言われる必要ないもん。好きになる事は悪い事じゃない。それを受け入れるかは相手次第だけどね」

「……」

ん？ダンマリになってきた。

「少なくても…相手をおとしめるようなあなたより、よっぽどマシな恋愛してるわ。それに…」

無理矢理、怒りを鎮め彼に畳み掛ける。織姫の想いを

「普通兄弟がありえないなら……そのありえない相手を好きになるくらい薫くんは魅力的だと言う事よっ」

少なくともあんたよりはね？と続けて言う織姫に、周りは神妙に聴き入っている。

「以上っ。なんか文句ある？言い返せる？」

もっとも、なんか言ってきたところで気にしないけどね。

口をパクパクして必死に言葉を探してるみたいだけど……自分勝手なお子様には、自分をきちんと持ってない彼に言える台詞はないみたい。

「わかったら二度とくだらない事言わないで。じゃないとあんた一生彼女出来ないわよ？」

自分勝手な想いをぶつける限りはね。

大体厳しい恋愛しているのは言われなくてもわかっているんだから。それでも曲げない負けないっ。織姫は純粋に薫くんを想ってるから。

様子を見ていた彼の友人が、教室から彼を連れ出していく。途中ちらっと織姫を見たけど、視線なんかあわしてやらない。

「織姫の気持ちは、薫くんにしか向かないんだから……」

そう呟くと近付いてきた友達に笑顔を見せて、暗い雰囲気を払拭するかのように勢いよく話始めた。

第４３話：少女達の恋。その６（後書き）

愛は人それぞれ。愛する事自体は素晴らしい事です。ただ方向性を間違わなければ。好きになると結構自分勝手になってしまうもんですがね。若いときは特に。

第４４話：少女達の恋。その７

「乙姫？何見てるの？」

教室の窓から見える校庭を眺めていると、かかる後からの声。授業は自習。外から聞こえる歓声に筆を持つ事なく眺めていた。

「ん？薫ちゃん見てるの」

振り返らずに私は答える。声からして美奈だろう。

「ふ～ん…。サッカーしてるね」

私の横に並び、体育の授業を受けている彼を見て言う。

「凄い…。相変わらず運動神経抜群ね。カッコイイわ」

所せましと駆け回り、ボールをキープする薫ちゃんに感心した声をあげる。それを聞いて、私は誇らしげに

「私の薫ちゃんだもの」

「はいはい」

呆れた様子で見遣る彼女に、少し拗ねたふりを見せ

「だって事実だもん」

可愛いらしく言う。

「その自信はどこからくるの？」

心底不思議そうな美奈。そう言えば以前にも聞かれた事がある。

「自信ねぇ…。確定された事だからかな？」

冗談じみた言い方に納得いかないのか、美奈は眉にシワを寄せている。それを見て、どう言えば良いか悩む私に

「辛くないの？」

「…？…」

突然の問い掛けに疑問符を浮かべる私に

「周りの噂」

簡潔に答えてくる。その言葉に少し考えてから、首を横に振る。実際外野なんか気にしていたらキリがない。悪い事をしているのなら別だけど。

「じゃあ…好きな人が同じだと言う苦痛は？しかも皆家族でしょ？…薫君への想いも半端じゃないし」

「それは…」

この問い掛けはかなり難しい。考えたことがないわけではない。でも

「考えた所で答えなんかないよ…」

私はこれしか言えない。

「なんで？諦めるとか、突き進むとか色々あるじゃない？まぁ家族なだけに後がキツイだろうけど…」

「そう言う問題じゃないのよ…」

私の答えに首を傾げている彼女。多分理解出来ないだろう。

「どれが正しいかわからないのよ。諦めるのか突き進むのか」

そう言うと軽く深呼吸し、私は話し出す。

「どれが正しいなんかわからない。このまま薫ちゃんを好きでいても、諦めても、手に入れても」

先がどうなりかがわからないとつけ加え続ける。

「私達の薫ちゃんへの想いは普通の恋愛より強いの。それは家族だからかも知れないし、１０年以上好きで居続けているからかもしれない。依存していると言ってもいいわ」

そう依存。彼なしでは、過去・現在・未来がないほどに。あまりにも自分と一体化し過ぎている。

「どうすれば良いのかわからないのは…私がまだ子供だからかも知れない。大人になればわかるかもしれない」

そう言いながらも、大人になっても無理だろうと心の中で思う。

「別に月姫達を蔑ろにするつもりはないの。だからと言って、このままの関係が続くとも思ってない」

私の一番の懸念は、薫ちゃんが私たちを気遣ってどこかに行くかもしれないこと。そんな事しても意味ないのに優しい彼ならするかもしれない。それが、どれほど残酷な事とも考えずに。

「私の理想は一夫多妻制ね。他の恋愛とは違うから…。家族でいたいなら…それなら今まで通り家族でいられる」

冗談混じりに話す私に、彼女はあきれながら

「でも無理でしょ？…いつかは答えを出さなきゃ。たとえどれほど傷ついても」

「わかってるわ」

薫ちゃん以外の恋愛経験がない私にとって、失恋や友情関係の軋轢がどれほどのものかはわからない。けど、この恋愛劇が世間よりキツイのはわかっている。

「いつまでも…日だまりの中でいたいなぁ」

心底願う。皆大切な家族なのだから。この日だまりに影が射さない事を切に願いながら私は視線を薫ちゃんに戻した。

第４５話：爆裂！！お兄さん。その１

「お兄さん。寄ってかない？」

妙な鳥肌ボイスが聞こえ立ち止まる。幼い声に似合わない呼び声に、首を傾げて辺りを見回すと小学生くらいの女の子がシナを作って俺を見ている。

「……」

「……」

見つめあい、しばしの沈黙の後

「ふっ。ばかな…」

俺は一人妙な納得の後、立ち去ろうとするが、例によって例の如く上手くいくはずもなく

「キャァァーーッ！幼女誘拐犯ーッ！！」

「何を言うかぁーーッ！？」

少女の叫びに俺は、即座に駆け寄り捕まえるとその場を彼女とともに走り去った。

「お兄さん…ホントに誘拐してるよ？」

小脇に抱ている彼女に

「やかましいわッ。誰のせいだと思ってやがる！」

そう言い返すと彼女を降ろし息を整える。全く毎日毎日災難ばかりきやがる。

「…で。お前誰だよ？」

「お兄さんの妹の苺です」

1秒とかからず返答を返す苺。

「キエテクダサイ」

「ええッ！？」

「何故に驚く？」

こんな妹をもった覚えはありません。

「おかしいなぁ？データによると妹萌なはず」

「なんのデータやねん」

はあッと溜息とともに言う。コイツ俺の事知ってるみたいだなぁ。

改めてみる。恐らくは5、6年生であろう、かわいらしい顔にツインテールのおさげ髪。

「そんなに見つめちゃイヤ」

手を頬にあてクネクネとダンスを踊る彼女。

（かかわるなッ関わってはいけないッ！）

過去の経験から第六感が告げている。コイツは危険だと。

「さぁ私の両親に挨拶しに行きましょうッ！」

俺の思いを無視し、言う苺。何が両親にだ？

「意味がわからんのだが？」

「もうっ。レディーに言わすの？」

頬を可愛く膨らまし言う。誰がレディーだよ。お子ちゃまがなどとは口には出さない。多分恐ろしいことになる気がするからな。

「二人の婚約発表の為よ！」

「なんでやねんッ！？」

恐らく来るであろう台詞だったがツッコミを入れずに入れないのは俺のカナシキ性か。

「初対面だし」

「私は知ってたもん」

「年が離れ過ぎている」

「マニアには大ウケよ？」

「何がじゃあーーッ！？」

意味のない押し問答に叫びを上げてしまう。

「そんなに叫ばなくても…１０年経てばお似合いな年齢よ？」

ヤレヤレと言った感じで俺に告げてくるが、そう言う問題じゃない。どうしてやろうかと悩んでいると

「何をそんなに悩んで？…はっ！？まさかもう我慢できずに私を？」

「おいコラ」

「やっぱマニア？」

「馬鹿言ってんじゃねぇーーッ！！そもそもお前は誰だよッ！？」

「だから苺です。妹兼許婚。萌えるでしょ？」

「萌萌萌と、こんな奴しか周りにはおらんのかチクショーッ！！」

相変わらず一方通行なキャラの出現に頭を抱えていると、俺を通報せんとする叫びが。そう奴の叫びだ。

「お巡りさ～ん！ここに連続萌女誘拐犯がいますよーッ！！」

第４６話：爆裂！！お兄さん。その２

「テメェ…何人聞きの悪い事を」

いつものように、どこからかわいてきた誠を睨み付けながら言う。

「事実ではないか。いたいけな萌少女をたぶらかす悪人めがッ！！」

拳をぐっとにぎりしめ言葉を返してくる。…コイツは萌から離れれんのか？

「もうブームは過ぎたぞ？」

「なッ！？なにをぅッ！！」

俺の冷静な指摘に、ガーンと擬音を背景にたてうろたえている。苺はと言うと誠をナゼカ睨み付けている。なんでだ？頭を捻っていると

「ツインテールのおさげ娘は、定番だぞッ！？」

ビシィッと苺を指差し喚く。定番って萌の…？あんまり興味ないなぁ。

「誰に指差してるのよッ！？ゲス野郎ッ！！」

その一言で凍り付く俺と誠。外見からはあまりにも不釣り合いな

言葉に、驚くしかない俺を置いて、言葉を続けて行く。

「まったく、あんたみたいなのがいるから世の中おかしくなるのよね。なんて言うの？クズ？家に篭って二次元妄想するしか脳の使い道のない猿は、さっさと保健所にでも送られれば良いのよ！！…ね？お兄さんッ♪」

「えッ！？いや…あ…う」

マシンガントークの後に、いきなりふられても。いくら語尾に可愛く♪つけても恐いですよ貴女？

呆然とする俺だったが、慌てて誠を見る。いくら誠でも傷ついたかもしれん。

「つ…」

「つ…？…何だ？」

誠に次の言葉を促す。

「ツンデレェェーーーーーーッ！！！？」

「やかましいわぁーーーーーッ！！！！」

誠の叫びに負けないくらいに、叫ぶ俺。何がツンデレだッ！！心配して損したじゃないかッ！

「見よッ！御子柴よッ！他の男にはツンとしてお前にはデレッと。まさにツンデレ少女！！」

「おーい誠くん？」

「気持ち悪いわねッ！…薫お兄さんダメよ？こんなのに関わっては。私だけを相手にして☆」

「か、完璧だッ！今神が舞い降りたぁッ！！」

いかん…。壊れてる。てかこんなのツンデレじゃないじゃん。ツンドラだな。凍り付くくらいキツイんだもん。

「と、とにかく。家に帰らしてくれ」

「だから今から帰るんじゃない？私達のスィートホームへ」

何を言うかッ！？プチ月姫ッ！！これ以上変なのは増えないでくれ。その時

「あれぇ？何してるの？」

どこか間延びした声に振り返ると、星野由香。

「星野？」

「お姉ちゃん！」

俺と苺の言葉が重なる。…はい？お姉ちゃん？

「苺？何してるの？」

「旦那さまを迎えに来たの」

「ちょい待ち！お前達姉妹か？」

「「うん」」

見事にハモる姉妹。なるほど謎がとけたよ。俺の事知ってるのも、どこか頭のネジが緩んでいる理由も。

「あらあら。苺ったら。だめよ独り占めは」

「じゃ半分こね」

「馬鹿言うんじゃねぇよッ！！」

ほのぼのしながら、さらっと恐ろしい事言いやがって！！

「とにかくもう帰る！！」

「「えぇーーッ！？」」

「ハモるなッ！！」

これ以上は付き合ってられん！！キッと一睨みすると俺は踵を返した。誠はと言うと…。まだ夢の国から帰ってこないみたいだった。

「ツンデレェェーーーーッ！！！」

第４７話：クイズ☆カオルネア（前書き）

かなり久々ですなぁ・・・

第47話：クイズ☆カオルネア

「あれ？誰もいねぇの？」
昼寝から起き、リビングに行くと夕飯がラップされ置かれており、置き手紙が一枚横に置いてある。

『みんなで出掛けてくるので、お留守番ヨロシクネ』

手紙を読み、珍しい事もあるもんだと、口にださず思う。大概一人はいるんだが・・・
「まぁいいや。久々の自由だ」
滅多にない開放感に、笑顔が浮かぶのを止められない。
（幸せだなぁ・・・何にも怯えなくてすむ時間って）
用意されてある飯を食べながら、このまま何もなく今日一日が終了する事を信じて疑わない俺だったのだが、気まぐれでつけたテレビの番組を見て固まった。

『クイズ☆カオルネア』

ミリオネアをパクッたかのような題名が目に映る。
それを見た瞬間――
迷わずにテレビを消した。
「なんでやねん・・・」
なんだ今のは？・・新手の嫌がらせか？俺の知らない内に、とうとう奴らはテレビ局さえも支配下においたのだろうか・・恐るべし悪魔達。
そんな葛藤を続けていると、テレビが電源が勝手に入る。
「・・・・・・」
もはやこれくらいでは、驚かんよ？

試しに他のチャンネルを回してみたが、全て同じ番組だったりした。
「くッ・・まぁ良い・・」
良いわけねーッ！と、心の中でもう一人の俺が叫んでいたりするのだが・・
そうしている内に番組が始まったようで、司会として画面いっぱいに映し出されたのは、あいつだった。

『みなさん、こんばんは』

「・・・ふッ。出てくると思ったよッ！」
バカヤローッ！！盛大に叫びをあげ、画面を睨み付ける俺。コイツは何がしたいんだよッ！！
『あなたの人生が変わるかも知れない・・クイズカオルネア。司会はワタクシ、マコモンタがお送りします』
ああ・・俺の人生は確かに変わりそうだよッ！なにやら、目頭があつくなる。
「あれ？・・へへ・・おかしいや」
涙を浮かべながら、軽くトリップしかける俺。
（悲しくなんか、ないやいッ！）
意識をしっかりと保つと、現れた解答者達を見る。
「・・・・・・はぁ」
当たり前の如く、スタンバイしている彼女達。
（ああ・・・なんか先が見えてきた）
シックスセンスでも、何でもない、ただ単なる経験則だが。
どうやら月姫が答えるようだ。
『では、第一問・・・御子柴薫が風呂に入る時、体を洗う順番は？』
・・・くッ！やはり、こんな問題かいッ！
『Aアソコ、B急所、C性感帯、D股間・・さあどれ？』
「アホかぁーーーッ！！！」
なんちゅー質問しやがるんだぁッ！！しかもAからDの内容同じや

んかッ！！
『全部よッ！！毎日覗いているから間違いないわッ！もちろん性感帯ね』
「ギャーーッ！もはやツッコミ所がありすぎて、言えねぇーーッ！」
あうう・・これって放送は、この家だけだよなぁ・・全国なら死ぬしかないぞ？
『正解ッ』
当たり前やんか・・答え一緒なんやから。
『では、御子柴薫の初恋の相手は？』
その問題に、他のメンバーの顔が厳しくなる。
俺の初恋ねぇ・・・
『A月姫、B乙姫、C織姫、D花音』
この四択しかないのか？・・てか、織姫はヤバイだろーが。
ブラウン管の向こうでは、何やら言い争いが始まり、
「あ・・誠が蹴られた」
月姫にけられた瞬間、画面が切り替わり

【しばらくお待ち下さい】
の文字が。
「・・そのまま終わってくれ」
独白虚しく、一分後再開されると、縛られ吊された誠の姿が。・・
乙姫か。
『テレフォンを使うわッ！』
月姫の台詞に、悪寒が走る。
「まさか・・俺じゃないだろうな？」
急いで電話の線を抜き、携帯の電源を切る。
これで大丈夫なはず・・。チャラーン・・チャンチャンチャンチャンチャンチャンチャンチャンチャンチャ・・・
「ひぃぃッ！？・・電源切ったのにッ！しかも着信アリのメロディッ！？」

ヤバイヤバイヤバイッてッ！？マジ死刑宣言じゃんッ！
「くッ！・・仕方ない」
覚悟を決め電話に出る俺の耳に、月姫の声が響く。
『もちろん私よねッ！？しかも初恋じゃなく現在進行系でッ！』
イキナリかよ・・やはり見てるのは決定事項のようだな。
「知らん」
プチ――：一言で終わらすと電話を切る。
（よしッ！ナイスガッツ俺ッ！）
恐怖を乗り越え、返した自分に拍手したい気分だ。
しかし、そんな簡単に逃れれるはずもなく・・
チャラーン・・チャンチャンチャンチャチャチャンチャンチャンチャンチャンチャンチャ・・・♪
二回目の着信アリメロディが流れる。
（ああ・・なんか本当に呪い殺されそう）
諦め顔で、電話に出ると
『もう☆照れ屋さんなんだからぁッ！』
コイツは幸せそうだなぁ・・溜め息をつきながらテレビを見遣ると、乙姫・織姫・花音が般若の形相で、アップで映し出された。
（ひぃぁやッ！？）
これは、下手な事はいえんな・・・
「悪い・・昔過ぎて忘れた」
当たり障りない答えがベストだな、うん。
『嘘つけッ！御子柴ぁーーッ！貴様の初恋は、隣に住んでいた人妻・佐恵子さん現在４２歳だろーがぁッ！』
「公共の電波使って、人の痴部を叫ぶなぁーーーッ！」
何故知っているッ！？てか現在の年齢までッ！？
『全国のみなさーんッ！コイツは幼稚園児の時にすでに、人妻をこました遊び人ですよーッ！』
「うぎゃあッ！俺の写真を出しながら叫ぶなぁッ！全国かッ！？やはり全国放送なんかッ！？」

『もっとも今は、近親相姦野郎ですがーッ！』
キャーーーッ！ヤメテーーッ！
番組主旨を無視して、暴露しまくりながら、俺の痴部をさらした写真を写しまくる。
くそぅ・・明日からどうやって街を歩けとッ！？
悲嘆に暮れテレビを見ると、月姫達が怒りのあまり暴れ、誠は写真をバラマキ収拾がつかなくなってきたのか、画面がブラックアウトし、電源が切れた。
「夢や・・これは夢やな。うん」
力なくヘタリ込む俺の耳に、三度あの着信が。

チャラーン・チャンチャンチャンチャ・・・♪

気配を感じ、振り返った俺が見たものは
「うぎゃあああああぁッ！！」
何だったかは秘密。思い出したくもないが、嫉妬に狂った女の妖怪四匹がいたような・・・

第47話：クイズ☆カオルネア（後書き）

オヒサです。もう忘れ去られただろう黒猫です。昔は更新速かったんだけどなぁ・・あふう。次はいつ出来るかな（^ー^；ギャグがノリ悪くて、しかも文体はかなり変わったかもです。後リクエストがあった主人公達のプロフは、なんとか載せたいと思います。いや本当遅くてスンマセンm（．＿．）m

第４８話：食べちゃうゾ♪

「うぎゃあああぁぁッ！！」
俺の悲痛な叫びが、校内を駆け巡る。
生徒達の間を、全力で走り抜ける俺に、またかと言う顔を見せる冷たい連中を尻目に、乳酸が溜まり限界が来た足を必死に動かす。
（いかんいかんぞぉッ！動けッ俺の足ぃッ！）
しかし、俺の努力虚しく背後から凄まじい怨念がせまりくる。
「アイ○ールド２１ッ！？」
あまりの奴の足の早さに、誠が叫んでいる。
・・てか、いるなら助けろよッ！
善戦虚しく、俺の前に回り込んだのは、我が幼馴染みの花音さん。
「くぅッ！・・さすが光速のランニングバック」
「何訳のわかんない事を・・」
息を全く乱さないで、花音は俺に相対すると襟を掴み
「さぁ・・イクわよ」
「なんか字がオカシイですよッ！？」
「うふふ・・・」
「キャアァーーーッ！」
叫びを上げる俺を無視し、不気味な笑い声を上げながら、俺を引きずって行く。
途中何度も逃げ出そうとしたが、叶わず連れてこられた先は、調理実習室。
「・・・うぅ。何が始まるんだ？」
「ナニかなぁ♪」
「だから字がオカシイですからぁッ！！」
「調理実習室でする事なんて決まってるじゃない」
「そ・そうか。料理？」
「薫をね」

ヒャァァーーッ！！お母さぁーんッ！！
ガクガクブルブルな俺を見ながら、舌なめずりな花音。
「薫の女体ならぬ、男体盛りとか☆」
ドンドンと思考が、月姫に似通って行く最近の彼女に、涙目で睨み付けるが
「あふん♪・・そんな子犬みたいな目で見られたら堪らないわッ！」
体をクネクネとしならす。
「落ち着けッ！ここは学校ですよッ！？」
「萌えるじゃない」
ダァーッ！燃えじゃなく、萌えですかッ！
冷や汗ダラダラな俺を、粘つく視線で見つめると
「さぁ・・食べちゃうゾ♪」
「んな可愛いらしく言ってもあかんわぁーーッ！」
全力で拒否。結婚するまで清い体でいたいのですッ！
「くくく・・・大丈夫、残さず綺麗に食すから」
「なんか邪悪な感じですけどッ！！」
いつの間にか、シャツを脱がされていた俺は、助けを求めるかのように
（月姫乙姫織姫月姫乙姫織り姫月姫乙姫織姫月姫乙姫織姫）
怪しげな呪文よろしく名前を心の中で読み上げると
「「「ダーリンッ♪！！！」」」
うわッ！本当にきやがった。
ガラッと扉を開け、三姉妹が現れるのを見て、少し・・いやかなり引いてしまった。
「ちッ」
なんか舌打ち聞こえるんですが・・
なるべく花音を見ずにいようと、月姫達に助けを求めるべく視線をやると
ジーーッと俺を見つめる三つの視線。
（しまったッ！半裸ッ！・・・このままじゃいつものごとく喧嘩か

ッ！）
花音と月姫達の戦闘を思い描き、恐怖するが
「「「イタダキマス」」」
声を見事に揃え、突進してくる。
「なんでじゃあぁぁッ！！」
必死に避ける俺の耳に
「仕方ないわねッ！皆でご馳走を頂きましょうッ！」
花音のフザケタ台詞が聞こえて来た。
「もういややぁーーッ！！」
泣き叫びながら、逃げ回る俺に容赦なく群がるケモノ達。
その様子をビデオを構えながら、誠がニヤニヤ笑っていたのは、お約束で。

第４８話：食べちゃうゾ♪（後書き）

連チャン投稿。頑張ったッ！！・・まぁ今まで更新しなかったけど。
もうじき５０話。長いよなぁ・・内容は薄いですが（＾－＾；

第４９話：メイドで冥土！？

朝ーー：
重い瞼と格闘しながら、教室の扉に手をかけ、迎えた先には
「お帰りなさいませ。御主人様ッ☆」
メイド姿の誠がいた。
ピシャンッ！
・・何だ今の生き物は？思わず扉を閉めてしまった。
「はッ・・まさかな。寝ぼけてるんだな。きっと」
はっはっはと渇いた笑い声を上げ、再度扉を開ける。
「早くしなさいよねッ！・・グズなんだからッ！」
ツンデレメイドの誠がいた。
「アホかぁぁぁぁッ！！」
目が覚めたわッ！バカチンがぁッ！
「むう・・メイドは不評か？」
「危うく冥土に行く所だったわッ！」
「ん・・メイドで冥土か。中々なキャッチフレーズだな」
くぅぅッ！何だ、その頂き♪みたいな顔はッ！？
「朝っぱらから何なんだよッ！？」
「うむ。御子柴よ時代はメイドだ」
俺の嘆きに、胸を張り答える誠。・・何度も言うがメイド姿だ。
ほかの生徒は知らん顔。てか、顔を青くしながら現実逃避しているな。
「・・で？」
「うむ。しかし、誰もメイド服を来てくれん。よって我輩自ら着用したのだッ！・・どうだ言ってみろ」
「何を？」
「誠タン萌えーーッ！とだッ！」
「死にさらせぇーーッ！！」

全力で振るった拳を、ハッハッハと怪しげに笑いながら回避する誠。おのれッ！何気に避けるの上手くなってやがる。
「気にくわんか？・・生徒会長に女子の制服は、体操着にブルマかメイド服にと、直訴してるんだが」
「あかん・・あかんで。ええ加減目ぇ醒ましぃや」
「いたって正気だが・・？はッ！？もしや貴様ッメイド服より普通にブレザーに萌えるのかッ！？」
・・もう、何でも良いや。一人戦慄しながら、何やらブツブツと呟く誠を無視し、席に迎い、椅子に座る。（見なかった事にしよう）
入口近くでブツブツ言う誠に、登校してきた奴らは誰もが、目を見開き唖然とする。
「もうじき授業か」
軽く現実逃避しながら、そう言う俺。月姫達が登校したらどうなる事やら。奴ら全員寝坊だからな。助かった。などと思っていると
「そうか分かったッ！時代はスク水だぁーーッ！！」
「やかましいわぁぁッ！！」
誠の叫びに、俺はやはりツッコミを入れるのだった。

第４９話：メイドで冥土！？（後書き）

またまた連チャン。今回はかなり短めなお話。いやぁ半分寝ながら（怠慢ですな）書くから、妙な具合ですわ。次で５０話。どうしようかな？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4881a/

らぶ・ぱら☆

2010年10月11日15時08分発行